女小學

全

口仁
2286

門口文庫
2286

蛤合之記

村上天皇の御宇
源の右大臣高明と
ゆかりの醍醐帝おはしまして
学をすぐれさせ給ふゆゑ
左大臣とぞ申す西の京の
大臣と世にうしぼれ
そ侍りしとぞ時の人
しの冷泉院乃
御宇にゆかりの人の
げんにより て筑紫
へ流されさせ給ふ
にひとしほ紀式部
京ばかへ
大臣はもちろん
ちゝ母はじめ
なを別れを
をしみあげさせ
て侍りける大臣ふ
ぜんにおぼしめし

はゝ様しの秘蔵し
たまふ海蛤耳白と
いふ大きなる一貝と
いふ貝のうつくし
をめさし湯貝乃
めさしをまゐらせ
乃ちゝにとて式部
ふ申さるゝけるくて
はしも覆面にまし
まして離別乃ちゝ
御涙まし
式部まいらせ
うつくしの貝と秘
うこにのうつ
めさしをうちに
ゆるしたまふ
ありせのひ乃
女房ゝちいと
奥ゆゝにおのいて
式部れうれ
ゝの中に蛤貝合のたちむ
ゝをあそばしはじめ

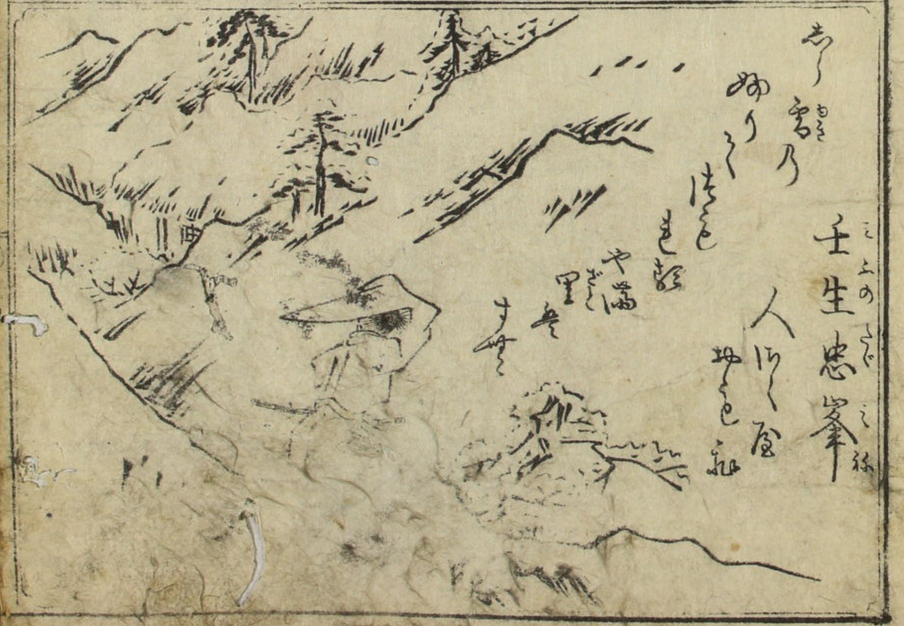
歌めるさの記

清和天皇貞観りおろ
八中ねを原業平朝臣
伊勢として行幸り園
下向ひ元帳み内記も
歌えよ徴り初りしま
す紙人しねどちぎり
てこなれれみ物じ
ちさうれとと
ヤせどきあ、
をそとりく
ゆかの尾花り
くゆあくあんと
てはいるねこひ
出びてまり
ふ歌もはるど
ヨとしゆせた
まひはくこか
りまひろに
ふ歌の方

より芳り
上の句松
重に来て切りふ
見ら人のワくも
しわを枝をひく
あまいしあくを
待て業平とり
ひくをたの松り
すこあくをの
さうりきく
陰のもとき
又まもふ
又あの陰る
さ見いあくれん
此わもひ死行幸るも
ぐりに尺くきり
あ色ようしく歌
かはさ松はりて
主そたそ松とうや
債松つとたと
又まを色だ
ふりふりいすりとふ

近江八景

古今集撰者四人



牡丹(ぼたん)

ぼたんハ花の富貴なるもの
と周茂叔愛蓮の
説にもいへりこれ
世こぞりて漢土にも是をめでて
めで遊ぶ人多し花咲
そめてより廿日を経て
ちりうせし花故はつか
草とも又ふかみ
ぐさともいふなり

へ咲しより散はつる
までみしほどに
花のもとにて
廿日経にけり

へ紅の色ふかみぐさ
咲めりそむかしのさを
何でもいふく

蓮(はちす)

はちすハ濁泥より生出て
そのにごりにそまず清らにて
たとへて周茂叔君子なり
されバ賞翫する人にも
人ほとけも是をめでて
遊びのおりく此花
の葉をくく露を清く
もちれバ世の君子とめて
ふかれんのみにて周茂叔
ひとりこのめバ愛しあへく

へ蓮葉の濁りにしまぬ
心もて何かは露を
玉とあざむく

一 濁りにもあか水より出ながら
きよき蓮の露かな

菊の花

きくハもろ〳〵の花におくれて咲ゆへ世に隠逸花とよぶ姿ありとてかの陶淵明ハめでたくあいそびたまふ秋より冬かけて咲花なれバやさしき花の第一とも又ハ翁草ともいふ異名あり九月九日に酒に浸して飲バ寿命長久なり例しのみあれ故事多し

〽つゆすゑの妹がかきねに移りて九重に千代まで見る菊の花さかりかな

ちよ經ぬへき君がかざしにされさかれかん

九重にさく庭の白しら菊

女中品定

▲抑世人へ出世しいけるものゝ中にて一ときものゝためしバよろ川乃智恵をもちちまバ花乃智恵よくうつしもちたるくもなつくもうすくとあまどられいで花より見すてそのこぶんからうちおさなくつきられしかて出でたる人の智もれバおもひますなりよろ川にこまうこれ八のちりゆきバ悪となりよく顔をれバ善となるたくバ兩落乃ふる姿あふう婦りて望むのこゝらひとぬ

公家

武家

妻 町風

民 百姓

未通女

妾

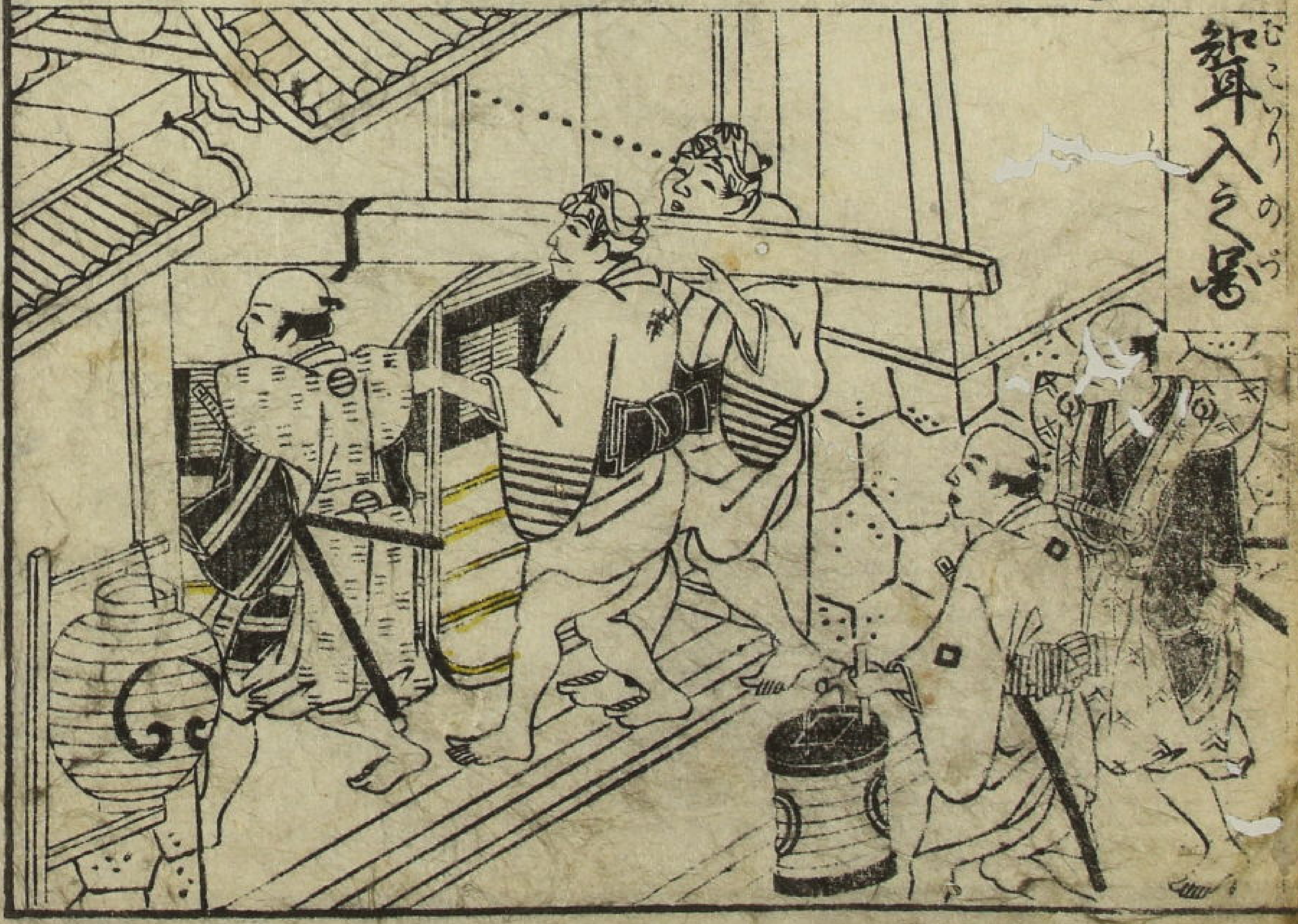
契情

尼

婚礼の図式

結納之図

おび一筋ハ袖ハ天に向ひて地ハ何ゆへをも
向むく一つ継ひく一つきハかのこゝろもの
就何ゆへも分限相応なる何かところ
女と見えしもはくも帯ハ一筋とかぎりが
本式なり其のちは紙をひて聟入ある
たし世俗にハ出ありて後むこ入りまし
まへりあしハ大によろしきと云べし
志うきとものりくばくハよく袴をうて
きぬ紙一とされば大事なり○然ども
んにはかせ式法にかくと申しまし御はれ
性をかぎさんといふはうかたなり女ならば
ざてと男の方はゆびかたちとをさんともと
ろより聟一なりそのくちよりよき道具紙
むこの方へおくりてのちよう縁の祝儀なりて
なるかよあいりれ御奉さき乃法式也
おのれなるよりども当代ハさしもんやや
くつろぎうたとせちし婚礼の席つき



聟入之図

さらぬほどかゝる金銀の道具多かれ
ほうぜうすみれば式法にかまはしまずよりの
楽ありて侍女房出むかひ化粧の間へ
おひゆきそえぞし休息さするべし扨座敷へ
いづるとき見えるを見居かて下座なり
ひとこそ客居かて上座席ひき見に居るか
おもり座につき三宝に手掛のしをとつて
次によろこびにしてからひさげ銚子出り
先よあしきもとりくもちをもとなりき
しハかはりけ三献ひやうに盃ぶめちどり
のしよりはんはかはらけとりあげまりて
一こんうけ一こんうへ扨まやく人々へよ
えうけて一こんはくありあまねて三こんと
そうまと聟へはうけをむとり二三こん
の三て中のかはらけとりて又三こんの三
これをとりあげてつりよよ三こんの三て
納さ下にらうけとうり三こんめて

婚礼之図

むこ殿はもとむこ殿のことなれば
はなはだまことめでたくもあり
てふたりはまことに双方こんづ三度へ
三こん九度こいりちやくこんをこのほう
ひとりにはとりにはあらねども
事は人筆にのべがたし此さかづきをすませ
て餐物をいとりあつかひ雑煮をいと
をとこ衆まち女郎こもをとりあつかひ
お給いつる其のちむこをいとりたりむこ
い少神酒をあつかりあつかりまきとを色をとり
いて其のちをとりとめけんざうを
一家はかりきをかりはく又日めぬい又日
ゐをりてはやはりくうをの里をみの
さうをとりてむこのうえかをのとをれば
をとしいつりをりたりにをとりとり一家
初行めてをんろい朋友祝ようひてを
てををとをとなりの祝をとりくをとを
ををはかりぬ

懐姙産後之事

世をもとまとめしるのハ嗣孫をもち
てる孫をんをあうををんをを大をり
をうをを女中ををはひに月の養生
ちいをりはく經あをはりくをいをん
にきハをはは湯の月とつしをあ
ををしをとををあしををのをを見をを
をををはををくををかをををををを
月ををりをを紙をををりあををを
いをををひをいをりはて月ををりて平
産ををををををををををををを色安神
数をのををををををを人産をを用をを
ををををををををををををををを
大事をりを産門をのをををををて産
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを

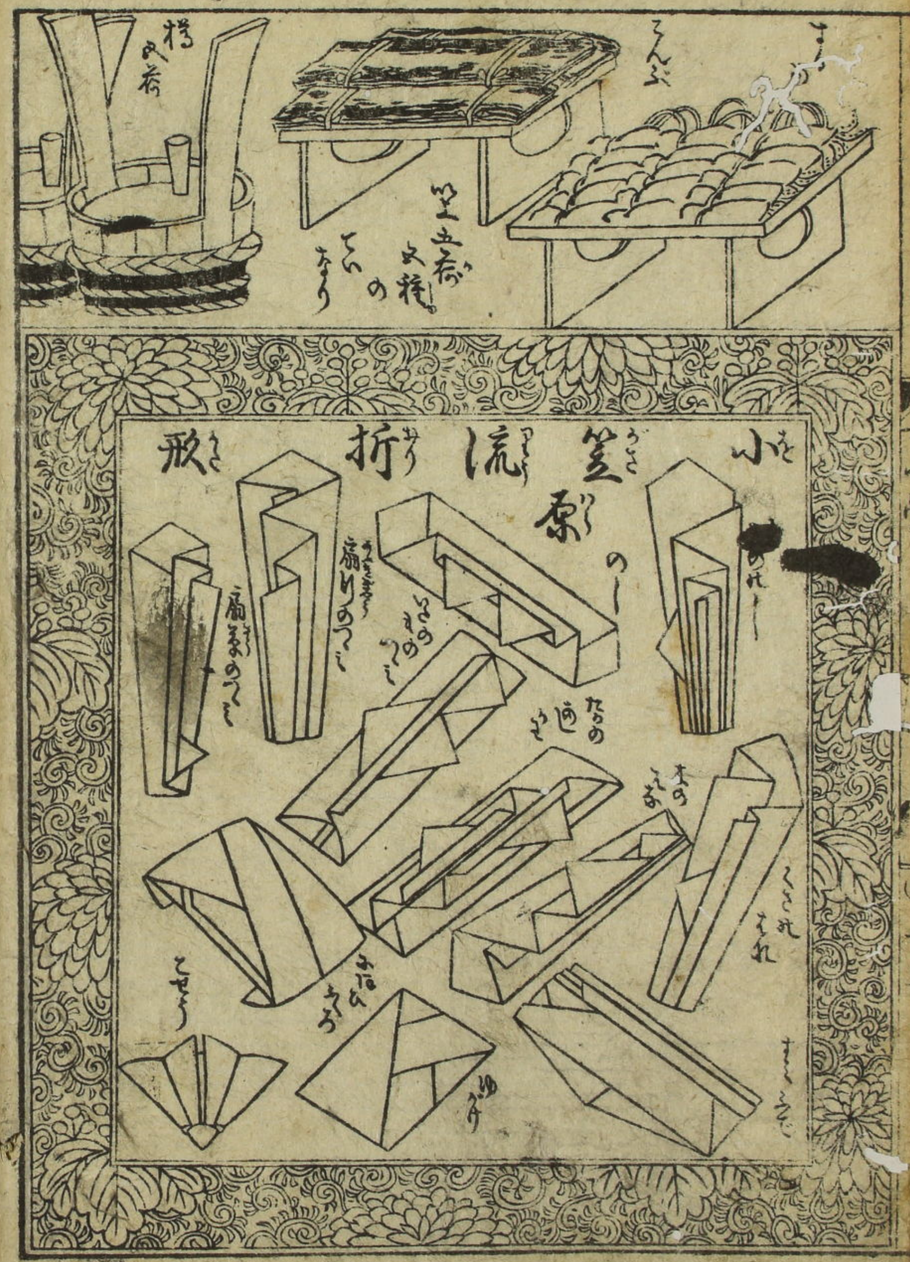
ゆまく後ことはくだし一年はまとたし
ほくくもくもはゆべ一生月やまひし
ちりもものりくくくまくうゆべしにて
出生月ゆゑ一日一夜とすだて乳とは
くだし　おれまていす蓮湯瓜ちげくこと
ちゆべし　甘草　芙蓮　辰砂
此三味とふり出しきぬこゆくしてのま
きべし　乳とつけてのちはやさくの
まぬも月ちり乳去ぬ月ちだくきり
をのもひて後毒とこうとべし　生地
月後ちゆ月ちりちく湯とひくゆ
うゆくたまうちけだいあしうぶくこ瓜
だくも三十日めし　夏はさやくこう
だし　ゆくもちげくひくだし　小豆はゆ
にちくじ八合めこきべし　衣ゆも
さひだくこにもだし　みを生地生の和
一ちりちゆこゆくちくめてこうゆべし

女中猴方之事

ゆのこやう八尺の猴ゑ三尺九の猴とかさ
ゆだくべうゆ九ちゆ九ゆのとつさ九ゆまうて
こうつさとれそくくべだ九ゆしうひさてう
ゆくーさうゆくまくゆけてくゆがくと知て
ゆくよゆ五ゆ八さゆ九ゆ時巻ゆのこくうゆ
初とすゆとてゆのほうとゆうてゆ九ゆの
ゆとゆ九ゆくとかけてつくゆくゆ九の猴
をゆうゆゆくゆゆからゆゆゆ九ゆゆくー
猴ゆけゆうこと猴ゆこゆ九ゆうゆゆ九ゆ
ゆーゆ九ゆくゆ長ゆゆこゆゆくゆゆゆゆ
ゆ九ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

綿
小そでのかたかど
白いろはきぬ

紙布
かたかさうるり
ふれそひとのすり
いつかぎ



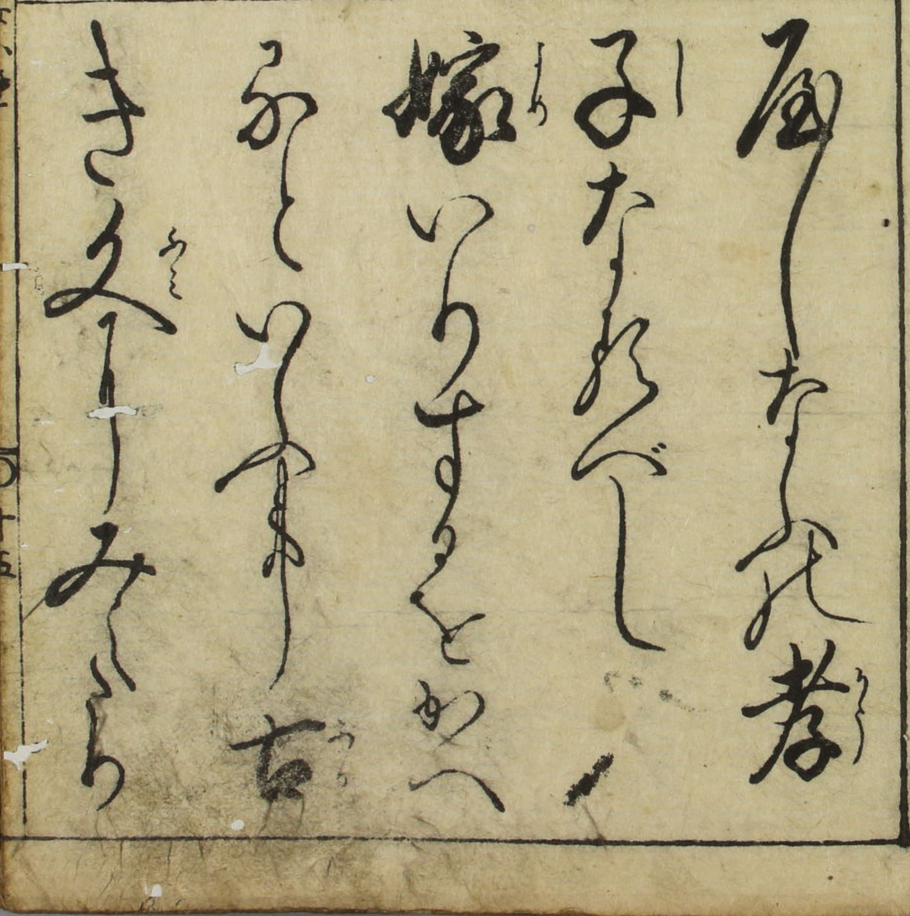
女小學

婦女子生れくハ
男乃行ひ學る
ものとなれば先父母
ものとして居て

大正年月日寄贈
藤田藤太郎氏贈
藤田

孝德皇后

孝德皇后ハ女帝ナリ位ヲ
ホウ帝ニ譲リ給フ孝天下大
ニ治テ万ノ人民百姓ノホ
ケ死ヌルナシ人ハ安ク
ヨロコビ国ハ豊ニ
ナリ大臣殺害ノ
ヲ事ヲ聞ク
タマヘドモ
天皇ニ
ヲ
ナ
サ
ヌ
ア
大雨ノ
ヲ
万民
テ寶
キ



蔡人り妻

宋人ぜむ[illegible]の蔡人り妻とあしまの[illegible]疾ふたりとなく[illegible]ゆく書れて[illegible]いづれ[illegible]思ひて[illegible]れり[illegible]おへようあ[illegible]せん[illegible]と女がいつ[illegible]り一方嫁[illegible]て[illegible]方[illegible]ま[illegible]疾[illegible]あ[illegible]茶[illegible]と[illegible]も[illegible]奥[illegible]も[illegible]ことをとれば懐[illegible]漫[illegible]て[illegible]やま[illegible]の[illegible]ち[illegible]天[illegible]れ[illegible]ば[illegible]入[illegible]

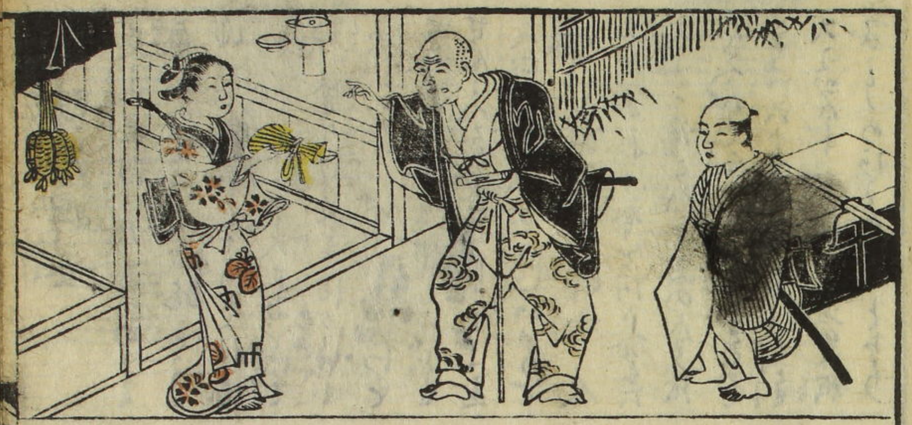
後成御女

家勝老ぼの梅ぬけ[illegible]
ひとりぬれ女たちぶみて見ろ
あとは昨男しも手も出入
まきべじんざたのしく
ひろんつり出ろ仏入てあ
ざけりて一花と見捨てう仏
さうまろと連ぶーけろを
ぶ氏女とうぶを一所まする
いぬのかゆふれぶ病花て
しねとうきをべんく大さ
おしろさゆけうつりふ
ぶ女房ハ俊兼ぬのけしを
父ぶりろぶ姿をやつー花
見ていぶーをけ〜〜ぶ

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

梅の白貞姫

梅の白貞姫白石勝ぐつ由ま死ー
て後うこにはじ死ーて世代
おらりにるかさらうしく
男の行れ死すと呉王き
あー死ー鵜と多くて
こまとむくのふよ貞姫れ
つふうう紙不幸にてまよ
さやくもるま墳墓とちり
てこ死女代道ケれ今まよ
ちこぐつ義と拾欲にめて
ん紙けぐとりのおり不義
汚れものと紙ーう幸ぬつ
王の改氏ー死まあーにとや
けまば呉さきあ紙ぐー紙
ちあこ貞姫と年ちふくく



ふうんやそ
乃下つこれわ
親のうちよりも
こ人の家よゆ
ぐりの生べりに

駿河婢女

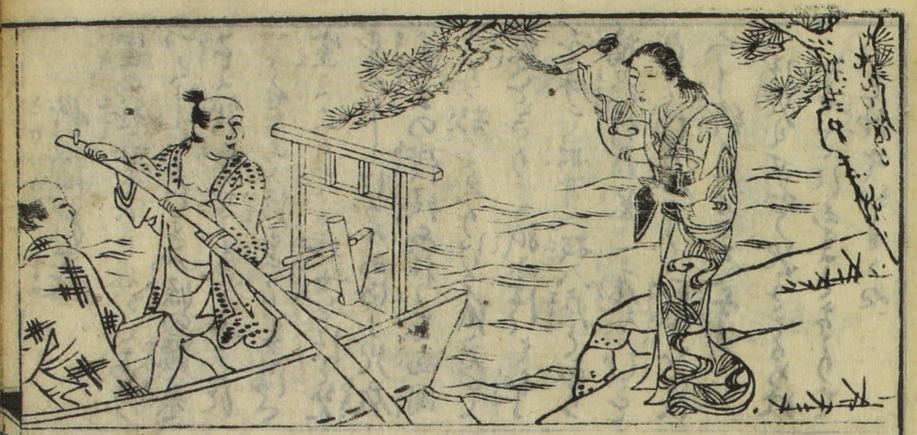
文永年中乃事なりし
[illegible]の富人家に稚子より
ゆづり[illegible]をそりし仏像
ありしか今ハ[illegible]をもて
親へ登りけるが主がある[illegible]
東ハ振居さへ[illegible]金ゑて
主ておこ[illegible]のしめども
せんすへなかりき[illegible]立
人のいぶんかりしがるを
聞りけ折りふし婢女一人
立出てわれ金をとらせ奉らん
夫ふの[illegible]ひ十両の金を
出せんと云ける婢ハ紙おもてを
とらハ五十両ハめどげしと主
大よかんじ[illegible]親よろこて紙
よりめでたく成けるとなり

親乃恩ハ居がゝ
わすれがたき事なれ共
とく理を思ひて
聞しい時で夫の
名をかふし命をも

捨るハ世乃ならひ
なり夫と我家
乃君なれバこそ
身をすてましとして
しれそ孫

斎の義継母

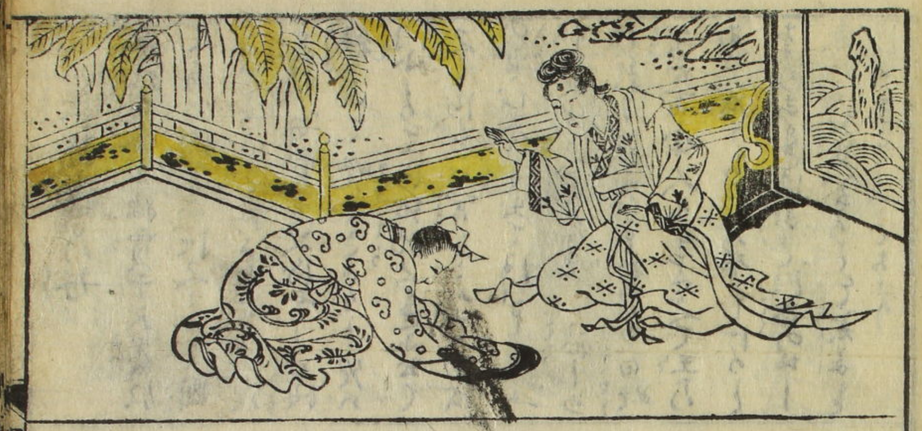
斎の宣王のゝ兄人とあや
兄ゝ兄弟ものとめゝとり
てゝ宣王ありしに者そこを
こそこをとの仏教しゝりとゝ
兄ゝいまをちゝゝ宣王を
母をめゝて官人をめゝてゐ
づゝきまゝゝ母ゝいまゝゝ
ところゝて兄仏をとりくゝま
ゝまとゝゝ仏教バ王者乃臣
を問ゝ兄たまゝゝ兄をこゝ
うむ西ゝ行ゝに義理ある中れ
るなをまバをとけをまゝまを
ゝ様をひるゝまをの義あ仏
ゝ仏めゝゝなをひ兄弟をもゝ
そすを母仏をこゝて義母と
号ゝたまゝゝ中れと



我ゝ
家を親なをば
嘆ゝ
ゝゝ
兵ゝ

竹園丈尼

室の姫女たちりこわかさちう
つくしかりけるとべ源の顕秦
こよ霧愛せくもこやこに
一こせそそ侍そそくもほさ
室ここりてこも姫女とはこ光
をそくしけつのあはこ丈尼
秦この僕侍ふはこ西園
こり姫ここりけつ紙こんて
繋ときりて紙ふはを手
を手て取井へ投へ尼こあり
橋尼竹乃長ここ屋をむを
びこむるんなくこ命とは
くく絵りけるこ手
「ほ丈も世ねう丈をこるめれ
ものさにあまこちりて
も神世ものこう



その主後ふくこ宿
らるのもで皆ふ色姫
ふこふけふふる
ここ四びて
丈を天みたへ

王孫氏乃母

孫氏大夫王孫賈十五歳にして孫の閔王ゆたかにして國こうぐうをたもつ孫氏の母王孫賈に問ふ母ものいはずして晩にきらるゝ犯人門ふりてゆく犯人をふせぐてくらげをべ宮こうつてゆく犯のぞむ今王出てほりまゝゆくゆくめくるやし犯しめけ歌を孫賈ゆくれつち百姓皆百余人をたゞちにて王乃あつ犯うちにろやしけるしちりあるまゝはあしに母のゆーあれよ犯ゆくりて来るとほめまゝうしちり

あり夫婦と
ゆくよなるか
よ志ゝびく
やまひあれこ
ゆゞ

真村氏の妻

真村助右衛門は氏八幡宮順貞御ふしてのぞうち弱くしくて酒は浴石ぜんぐくまりなり天正十一年九月十五日未刻の頃と聞のる時つまは日来懐中紙五枚ばかりて出産供ぶ迄て脱しるものあるべきをいろいろひそかに一枚又くまのり紙せぐとのはをなを紙をうーはさてあるべき紙は粥と黄酒とおろそし出産といふ事を表紙ばかりに成軍ちゝ紙はくをふまりて外くしゝが一族万部紙いでゝ一生ふ産ゆとゆゝりけれ

たゞ〳〵拝む

ゝ紙まで産

ひはしみ

ゝまつゝぶあや

ゝれゝ産

この紙部紙ゝゝ

ゝりたゞ産

ゝゝゝふ産

拝とゝたゞゝを

ゝ紙あゝ紙

盃が

盃がいとけなくはしくなる
しく況商人の隆ふ家なれしを
主よあさはよ賣買乃まを
のこしうかひより母はなし先し
けるかあを祝ゐまと蛭況あく
あく況し富況人ふふと寿乃
かとりありはきハよ代乃ちび
ホも死者況かうひうま況
ちさま人ゆあを主と況ゐるを
おくなきあるがとやし也
時よ者ゆとれとよやと況ゆ
たま人ハを主よ代日時よを
ちさまひこはあこ天下に名
をかう況程人とありを
こ況ひこと毋乃主ゆへ
なきのこ況りゆなりと

なりん志れきき
ゆとりと法志る
ゆみも敬を
世乃人人皆志ろ

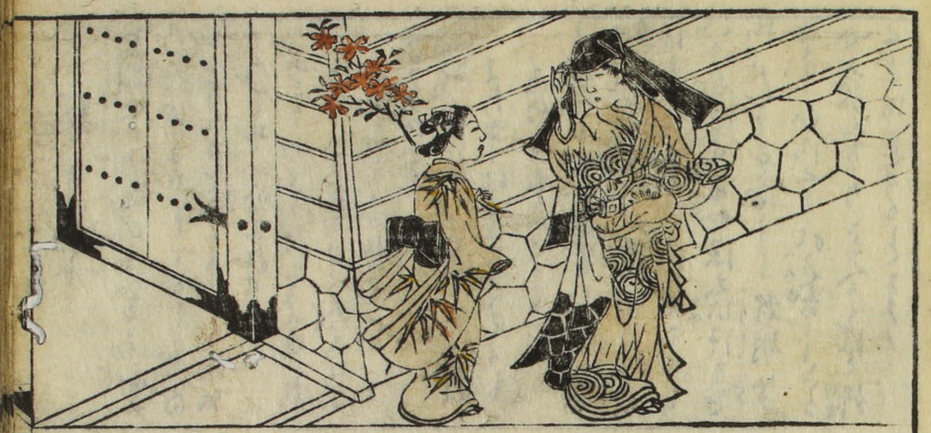
業女

瀬川の業女は乃ちまたの
秀吉朝鮮を討ち入るとて
瀬川も見に出でさうひ乃ぶ
業女まさを遠去さふ事一日
なんーをいもるーすしく私
だう紙をとめて文とおろ
けるよしぬ孫逆風とあつく
きるの業はまー入時まのうしに
ふぐをとうげる紙間人指ひ
しりてたちに紙をと秀吉こに
げそてまつぶきも文神名業
保ちし紙秀吉もあろざしれ
せのまう紙あをとし瀬川を
ねぢへうーえーーーまぬと
御前ふさとて出陽とうさ
ぎをりけるとなり

乃乃ちまたの紙に乃ちべう
瀬川をどんれんべうを
ぬるとみて紙と又
二十でーーーきんた
ーーーーーー

女宗

極東流はほふこうしれ
衣裳とき所ゆをいく姫てう
あるしれまれ女宗ひくかき
衣裳といさしめうさせん
せしに極東流大しいうりて
うをはるまのひ紙をう
げるやしおゆ紙をげすて
もしに女宗ひどう変をく
花乃衣類をのう入てのち
侍女をいざーておにとちくに
ぞさじゆーにて物へはめう
うるれいちくうるれいあうし
きうおうるをのとしいうせ
らをけういおとてにちうて
極東流うるれおしきは所
ゆをやめーをけうとあう



敬乃そう
ぞれゆへたりを
角りみくこれ
と表ぞ
色ハ玉子をいろふ型人と
ゆとへたりうくそれこう
えうしわどんと思まうれ

梶原妾女

頼朝公の御所の大名を御堂
の花見にまねかせて色々
女なりけるをえらんで大名
のこのみにてやせさせけり
のいれへ主殿にて見せ給ふ
ほそ〳〵のかきまきをんなちかへ
まゐらせたまへ
女ども皆いづれも
「いづれの花ともまさらぬ
よの中にさきそめたるも
あのまへにかへりなんとて
と歌をかきつけたりければやがて
めされし当座にてよめる梶原
源太が妾なりかくてのち
いかなる事にや源太はまさを
はなれしとかや 頼朝
をはぢひきて世に出しなる
女なりとそ伝へられける
かくはるかにさりけり

かうしにうくゐそのしぞ
秋しれは人ぬおしきてかへてそう
人のまうされうすもとこたり
なりよりく人と申しこうゐりよ
ちうよ家をうれをのしれ
これ聖人のをしへかへりかまま
家なりはくしまみふく
おもひおもすべしとてもいその
母のゆえてうしよ家ようや
ちしたやく人むしましみられ
車でまいりひ是人よまし
かくれとして世家よりてなるし

はくたえにすは
はしみおもひし給
はるなやさしたるふ
あしはし孔子にの
教りしを孝ぬふ

斎宮女

[illegible]

[illegible]

物語

[illegible]

手習文字の事

[illegible]

手ならひハ[illegible]に弘法大師
いろは四十七文字をつくり
出し玉ひてより志きしてこと
たらぬといふ事なく手(ひ)と乃
女子も仮名(かな)ばかりしるとも文(ふみ)
みかくこともしれる事なりみ
とも見てわかんぬかよりて定
かなきして用を達次いろは
のこくやもあるあるべし
ふるきハ筆跡(ひつせき)ら満りける
ぎしくも文章(ぶんしやう)にされれ
又いふ文字をよんで同様(どうやう)
にある筆一とまて縁(え)みへし
小野道風といふ能書(のうしよ)
中ころにてあるしひよ
倭あるにある名筆(めいひつ)
よ庭(にわ)と見えどりぬまうふ

人はまづいはみ
あそしされ何
あらまもり
しねらん中のは
とかれしいそ

志く筆(ふで)と紙(かみ)に
とん(とん)出(いで)し書き壊(えん)
恩(おん)乃恩(おん)の字(じ)紙
百(ひやく)何(なに)まりき人
みをも何(えん)人あり

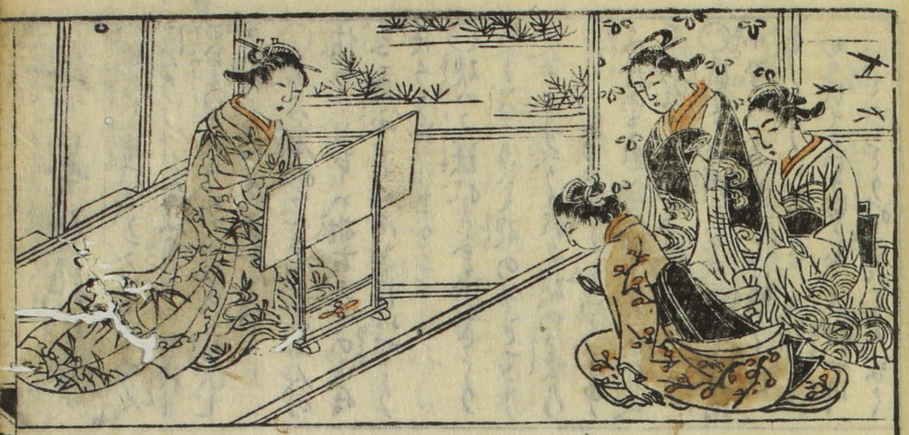
地中の埋杯のはしにあうると
是ハ一ぱいぢめハ二ぱい計ハ
さうよりはなはだよろぢうく
強よハれはにくび相ろ紙尾く
相ろよりをかくれどくんよ
れこさり物ハ新ハいかどうひろ
ひんを日夜ハ新こ世ハ石紙あ
ぎうハこのろ人おれ乃風ハ紙
乃ひろの中ハと伝ハ一たま
つまこと九しかもぬり犯者と
ハくしおよ入くかくれしう
ばそ物ハとろ伝ハをこハ是ハこいう
あるのハそ中こ有ひりをこハ通風
のろふ稀四ーー古者のたり
中ハ伝ハくいをてけいこ行ハ
強ハハ能手れえをはろ物
し沖ハ中ハ中れり

ひべたるうれまに和しき
人乃ハれたをけをを紙うる
あるのろうんや悪人字い
ぬ乃下れるんべワひひに書
付るまとまをしや
思ハかハ人ハ
ひんこ人乃常
なりあるなれ

人ハ
ひるまふ事を乃
ちの人ハ之繁
なりとハ呂業
ひるハ人乃数

伊呂波のり

伊呂波は十七字へのり歌の
ことばをふたつ長へ世へ弘法大師
の作とつたへ侍る。
いろはにほへとちりぬるを。
長まて護命僧正作
わかよたれそつねならむ。
うゐのおくやまけふこえて
あさきゆめみし。ゑ
ひもせす。
長谷寺弘法大師の作
片假名は伝大臣天平勝宝
年中に大和の都におゐて
文字の字の点画をとゝ
のえて片假名四十字を
はじめたりはんまんの人



身をわたりみる
寄べきことは
数くも也ぬ
うらゝ拾くんを
夷おてこそ

筆墨硯紙の事

○筆ハ唐にてハもうてんといふ人
はじめてつくり日本にてハ応神
天皇の御時はじめて文字を用ひし
ゆへ是よりはじめてあるべし
○墨ハ唐にてハてんしんといふ人の
作なり日本にてハ推古天皇の御時
高麗国より曇徴といふ僧来り此時より
つくりはじむ
○硯ハ文殊菩薩のはじめて紙にさゞり
さまざまの文字を書て硯の始をてす
[illegible]まへのに文硯の墨乃
をりたるをべしと見ゆる事
文殊の[illegible]と申[illegible]
て名付けし宝なれ手に入べし
○紙ハ[illegible]の洛陽
の[illegible]に漉そめし
事なり
[illegible]紙や川
[illegible]のちぐれて[illegible]

誤れりとわれん[illegible]
まよはぬたすけと
人ぬすみをとそしり
人をせむるはまれ
わきまへたるよし

和哥乃事

和哥ハすさのをのミこと出雲乃
国に宮造りし給ふ時の哥よ
「八雲たつ出雲八重垣妻ごめに
八重垣つくるその八重垣を
此哥よりはじまりて人代へ仁徳天皇
の御代に難波津の哥とて[illegible]
御世よ弘まりそのち貫之躬恒
勅をうけて古今集を撰じより
代々にあまたの集出来て今はうち
はんじやうする和哥ハ[illegible]
てはじめいけるもののいづれか哥をよ
まざりけるやわけて女のかたにやさ
しく目に見えぬ鬼神をもあはれと
思はせ男女の中をもやはらげ[illegible]
[illegible]
このかた[illegible]
[illegible]

はしきあふこそ
あさましかる人も
身のうへぬすみさ
故知てはなくなし
それ人のうらみ

て年の陸奥ちりなまゝ
○万葉集
是は奈良の長岡帝の時
勅名を家持撰ませ
○古今集
村上帝の時
○後撰集
花宴の時
○拾遺集
此三書は二代集
○後拾遺集
白河院の時
○金葉集
鳥羽院の時
○詞花集
崇徳院の時
○千載集
ほり河院
○新古今集
ほり河院の時

人のうへ
あるばかりなり
朱子
花宣
人の詞
人とはよまじ

以上六代集とゐいとと八代集と云

○新勅撰集　藤原定家卿撰

○續後撰集　藤原定家卿撰

○續古今集　同卿撰

○續拾遺集　亀山院御撰

○新後撰集　藤原為氏卿撰

此六集と八代集併せて十三代集と云

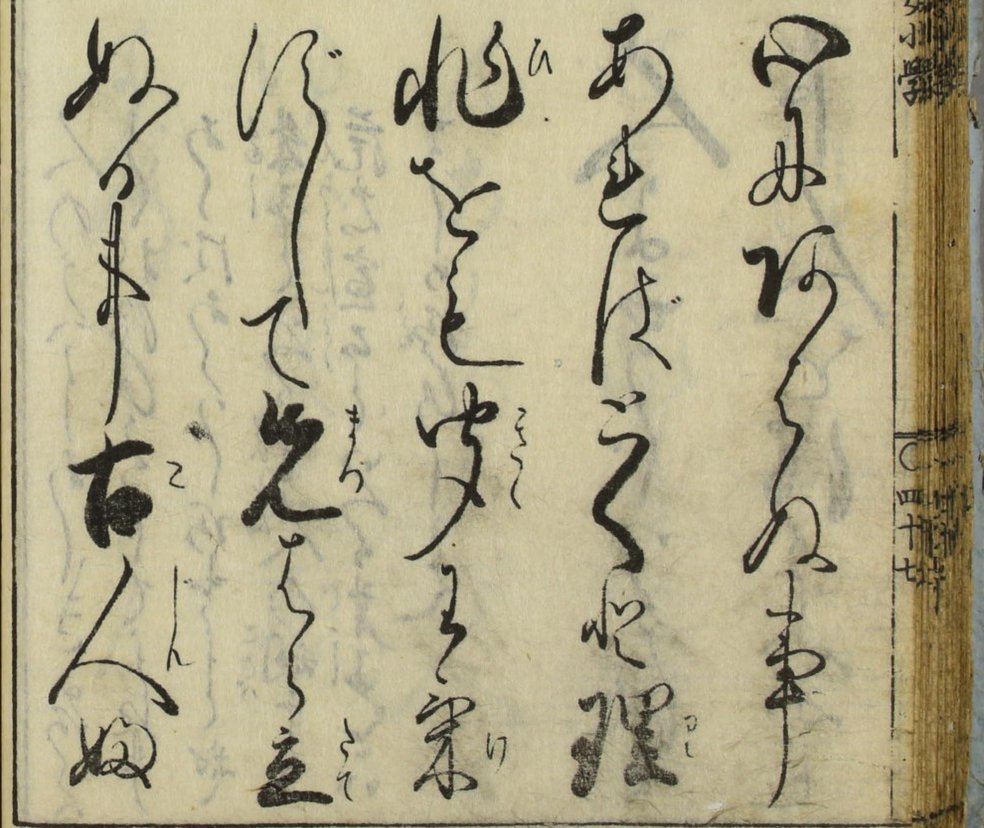
○玉葉集　○續千載集

○續後拾遺　○風雅集

○新千載集　○新拾遺

○新後拾遺　○新續古今

此八集と十三代集に併せて二十一代集と



和歌續仏得道

業平人倫和哥法物

和哥を神代よりたゞ淳和が目のうへとせるゝ事

ちうとゝもいまゝしてこのつちなどう一鬼神を

のんぎ一えん男女りゆ

そもやまとげそもそも

とのくぬれる仏もあぐさ

ひまをそ和哥の法せうや

おり園とすれば人をく

ゆふびようびだけのあり

ちうまとすれば人の世をいとうて

人りあ的殊すれくれり

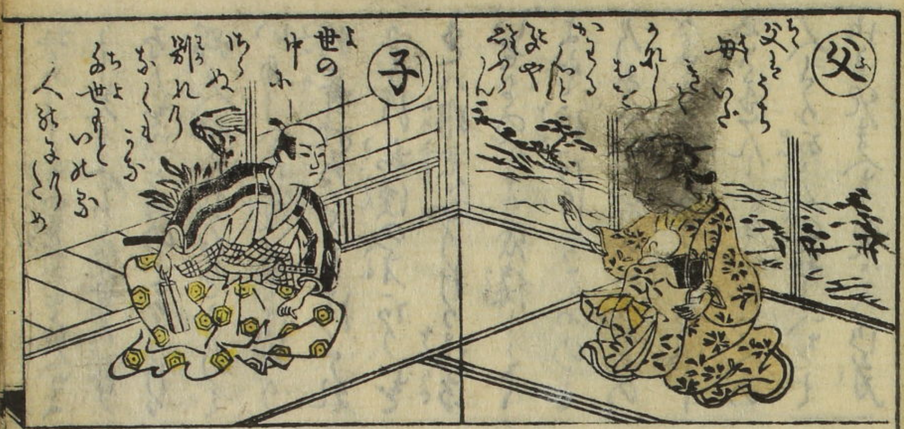
ゆくとそ和哥ぬけそとと後へ

めるるやかりハ中ちう

いづをれいあへ猛虎ほ
ひとさう山のひこうへん何
すれとあ〜そこ奇のを
がさおのづこうけさう
やごて人のんぶんぞ
むゆるぐちりきし世
てぐりてきぶれとぐさを
いやしれけこうたれん
をゆされさひぞのこぞ
ちたう陽こうこそ亀おのこ
乃歌ぬいむのを木ぬ人
ちをぬおこちちこ
悪鈴のこうぐおおいこづ
乃たうやをれこうこ
こもいゆむだたこや

ぐたち詳
計こ歌
乃ぐ物
歌こつこ式
よ撥
こすをいこぐ

義こ敬こと教こと
なこ人れり沼こうを
こ乃こ志こうこ人と
ここうこ於こ
事こ清れり


父
子

夫
妻

そこあひのうん茶あび
業まのり歌と乃ろ江今乃
世こたくハ飛ふおれろ人見
徒のいさはゝ人ちれといゝ
光坊へ寄ゝとけゝとちん姫
ゝう江光くはゝう教寄を
幸ふの婦人ゝいとゝ雅よ
ふゝ好りけゝかゝ徒ゝう
をゝゝくゝ坊とひゝゝ人乃
人ま都ゝちゝ江ゝう人ゝ
ふゝり坊ゝて徒ゝてゝの
家ゝゝう光ふさけゝ花乃
徒ゝ寄光ゝりて幸人ぬ
女徒ゝいゝ寄ゝ光ゝま光
ゝう江保ゝゝ幸江

物語

注

歯いたゝ徒ゝゝゆゝそこね
舌ハ屋ゝゝゝなゝゝ人ゝゝ
ゝて我ゝ徒ゝゝゝゝ古人
ゝ歯ゝ舌ゝ江ゝゝゝゝゝ人の
ゝけゝくゝゝゝゝゝゝゝん
たゝゝゝゝゝゝ

仲中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人乃世ゝ徒ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

掛香の方

梅花
一竜脳　八匁
一梅仁　八分
一麝香　六分
一丁子　二匁
一甘松　三匁
一白檀　二匁

松の芯
一白檀　二匁
一龍脳　一分
一沉香　一匁
一菊花　八匁
一麝香　二分

たかや光
一沉香　一匁
一丁子　八分
一白豆　二匁
一甘松　八分
一麝香　四分
一龍脳　二分

名方
一藿香　一匁
一丁子　二匁
一甘松　十匁
一麝香　三分

物なり陶器

本草味製法

一麝香　紙一つゝに入れ日ひ
一龍のよだれ　白ごん　こまかくこなし刻み日ひ
一沈香　日ひ
一藿香　日ひ
一甘草　あぶりて用ひ
一ちゆう　こまかくこなし刻み日ひ
一梅仁　日ひ
一菊花　花をもつて紙つゝみ一ちゆうあつとりけく

物語

陶淵明やつかへをこばみ
下人とゝもに海内の
よくらんをつゝむ事をゆ
紙をもつて袋とす
ちゆうをもつて
ぞ

ちくしの地くし

○小神こたつて此ちくしの
一名こゝ語一合入れ
さまして
皆ゝの粉とをかけ
天火のしたにて
○うゝ此ちくしみを
を
○日ゝこのやにの
○雨ゝとりのかくしゝ
○うをゝ乃血たゞれ
はゝ此ちくしへかゞのけそ
あゝぬを
○人乃血乃付ちくへけそ

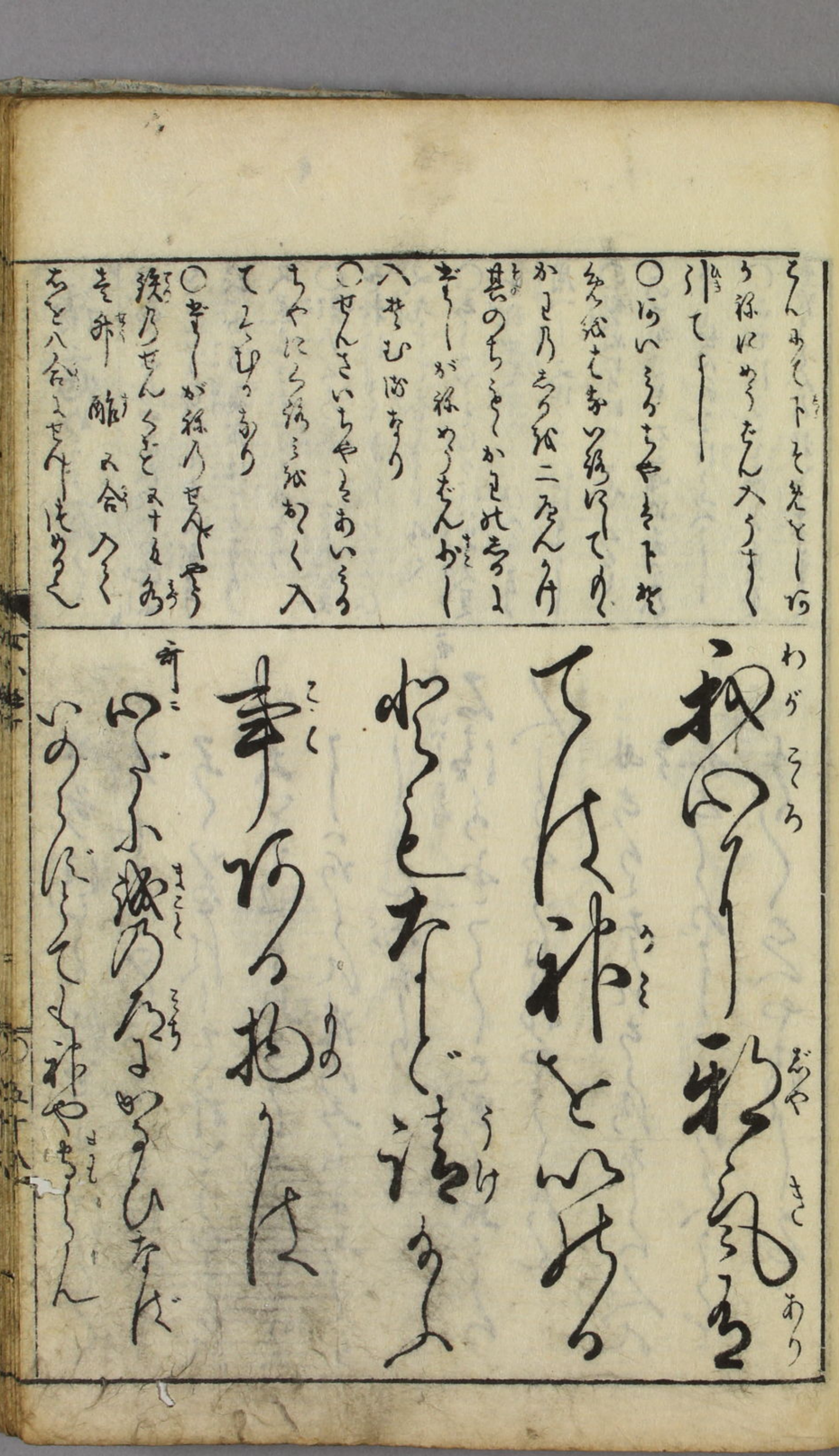
人は生まれて
やがて
仁義礼智
乃ち
梅
孝とかうして
人の道を

おやこの秘伝

○こんだいの色とおやのいかの性
下地とそういろはえ
うりやとこんぶとけうこの
くわかいとこんぶとこんぶ
入くやらくこと
○とくあけ色へだんご
を豆のちからそとえを
めはちり
○こんぶとこんぶちやしを下おや
をむめれちからくこんぶ
そえうえ
染
しめうちりちる
おむはうり
○おじてちやはそむるハ

家ハ一居く親よ
うちを親
天ハ

こもしかとはるく仕そうく
くゝ絲こそ出しがあとを
こそめうむんしろもこ
てし茅こそめうちん
たうこそあくゆくし
あうひへをつ梅乃ちう
ちじはるく春ゝ絲はくろ
あうこにこそべし
○ぬゝ色こそはうゝこそや
春花乃はるとたしが絲
すこしと入くこむうく
○みせ神しの絲を水蛾
しゝ絲ぬん巻めそこそ乃
うへをあたゝしかゝぶし
入く巻うあうり
○みせこちたの絲いう



うんみてトを先としは
う絲はめうたん入うすく
引てし
○はいいうちやをトを
色絲さ事の絲はてす
かゝ乃ちう絲二ちん外
甚のちうくかゝれちゝ
ぎしが絲めうたんがし
入きむはうり
○せんさいちやをあいう
ちやにう絲うはくく入
てこむうあり
○きしが絲乃せんしやう
絲乃せんくゝと又十ゝ色
を外　酢　又合　入く
ちと八合こせんしたうく

諸病めうの薬

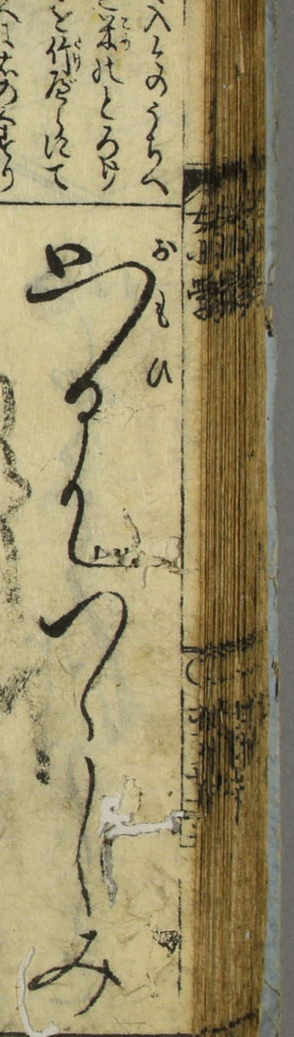
○面こんの乃やまひにハ白湯よ
をさけてひるゝ一ぱい飲ます
いつぢの乃病ハ活ぢうち
又黒すぶまもしくハ黒ぬるり
○新乃くろ粉よハ冬ハ肌ぬ炭
を粉にしく茶紙ぬりうひ
又丸じて食てしぬく
○ちゝうとゝもむのにハ黒大豆
を弼ゆてせんとしひんあり
用べし又ハくろ皮をしし
○髪ぬけるにハ　ゆ　ろゝ
このてかしを　ゑこ味紙あるひ
うしぬんあるはうふべし
○あせぼこゝ歳どう貝を
やけうとんり粉とまるもせ

然ほうとんとよつ
冷じて四ハいまし山づし
ろくいるばして神とうやまち
天とゝ神とうちゆがとゝ
うしハうしハ味のみちよふしら
しうんるちう
石清水こいしうちわごうしと思ふ人ハうち
人しうちうね神やうしんん
毋ちうとちれちうちうちうしん
ちうちわしいりうべうど
ちうしうとんや時しうや

布に包こうかけてこう
○ふきひよの蜜陀僧の
粉と乳こそこそ紙さ毎よ
りてたらる日はひはくし
日又交そいもの
○去もそれい茄よりあさ
とひとりじよ紙せんじあつよ
又六月六日 十六日 廿六日
のひる紙こりはそこら白
日よりしをそくをもち
ゆべし
○ひに揉り実ば
ゆ
○あさい六月よりうさを
こりうあやそりて石灰
中ゆあとをはそれひと

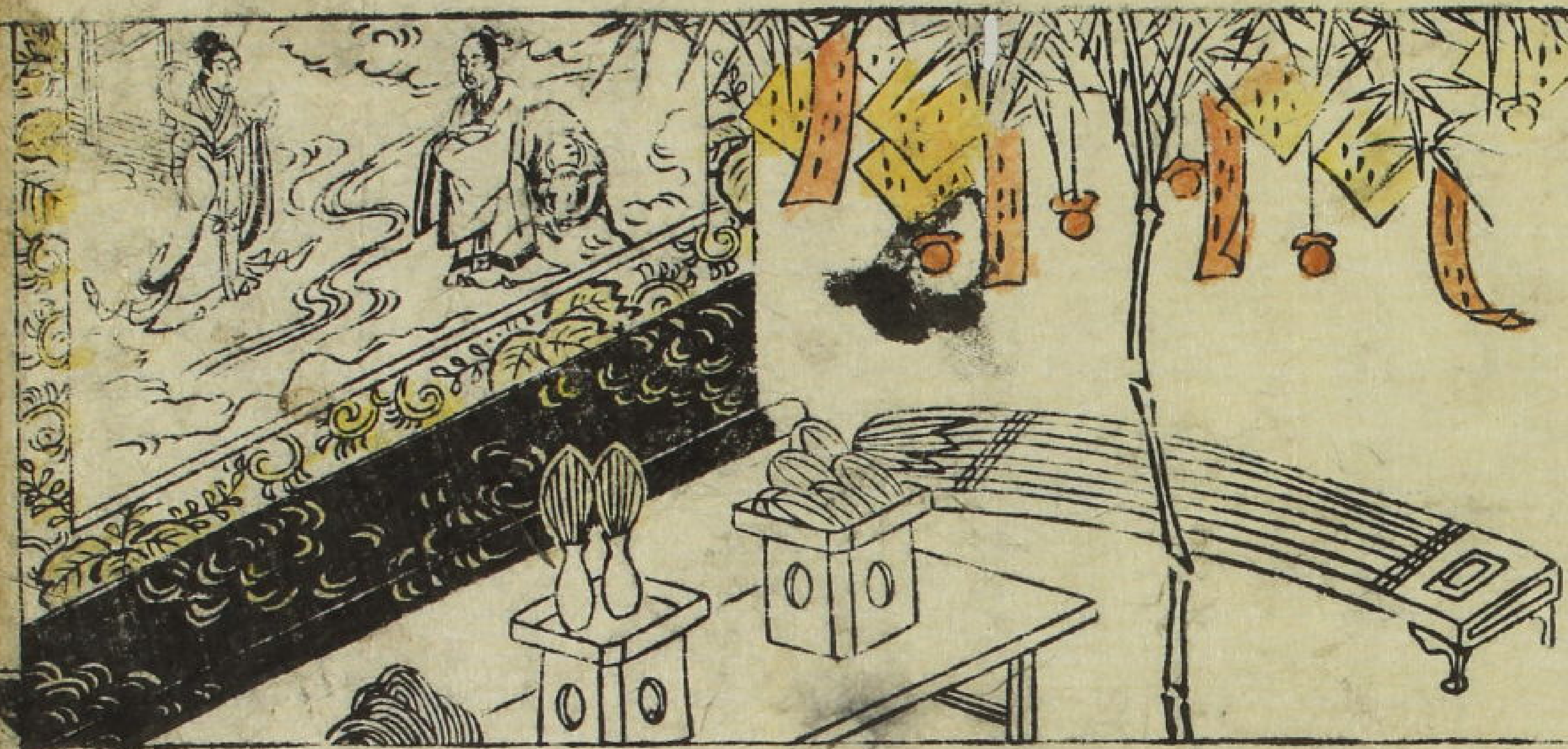
侍りてかうまう
我ゆるひとうら
知うるる時い百人
よ思まをうの
ゆうそれと

あひさしくこゝ入てのうちへ
ぬち米とのまゝ煮れしろど
うるこゝ死にけさと作りこれて
こゝをぬりうへこなのくもり
をつけ紙とりへ
○かくぬねさくもり
庭 石ぢい 苔ふこ ひつまを
あつおくこゝ緑その間へこちら
茅ぬうへを死を乳吸うる
とたつけてこ
○いぼ紙ぬくにこ いぼの
大さこ紙こてこ紙こ
らへいぼにきを火とつく
ををいぼれきこまそやけ
ぬかりうくれこ二三火
ほこををたいぼ乃ぬ
こ物ちぬかり



○かこそへこもり
山椒 白芷 川芎 紛十文
万薊 まつく香 隠る
各文 右こ陰にきぬこ
きぬこ陰こきぬこ
ぬこ乾れ
ぬこ乾に廿一日ひこ垂て
十日こ三度てえげこ布
あこひへかこうを死こ
ぬこ乾こ元用れあこつ陰
やうにまべこ
○あこい粉乃方
丁子 白附子 白芷
白姜蚕 白茯 白蒺藜
茯苓 右粉こてこさく
かを紙こ乾こへで乾こ出こ
玉乃おここまれここ
物ちま

乃あ
まこ
のこ
内こ
琴こ
和こ
乃あ
ひあ
しき
えい
ぬこ



人は耳目口鼻乃欲をつゝしみ宝をむさぼる欲ぬすみしもふれど人の恥ハ皆欲よ

七夕祭乃事

七夕といふハ牽牛織女の二星なるべくよぶにて男星ハひこ星と名け女ハ女ぼしを織姫と名今乃世まて絵くところ日本に牽牛といふ名ハよろしく牛を牽く風情をあらハし織女ハ河鼓星といふもの又牽牛にそなへたる衣をちらく乃説を唐土にもおこな我国にハはじめてあまたくさしまれひさしき名をもつて年[illegible]ものなり[illegible]古代

ことさらいつはりかざりはあらけなきものハ人のきらふなり心得べし

又に
何事もさしいでたる女は露ばかりもしとやかならでよろずにつけて恥あるのいましめとすべし

又に
よみてよむ歌は世中に人の心の種を見せるむかし人の心をいひし乃ことばぞまことなれ

七夕奇ばし

紙屋法師

妹の為紙ゆえ火よりとく早合の
うけまれ人のつふ[illegible]

後朝

七夕や天の川ふね岩ほうて
ほうもとてはあけねばよしな

躬恒

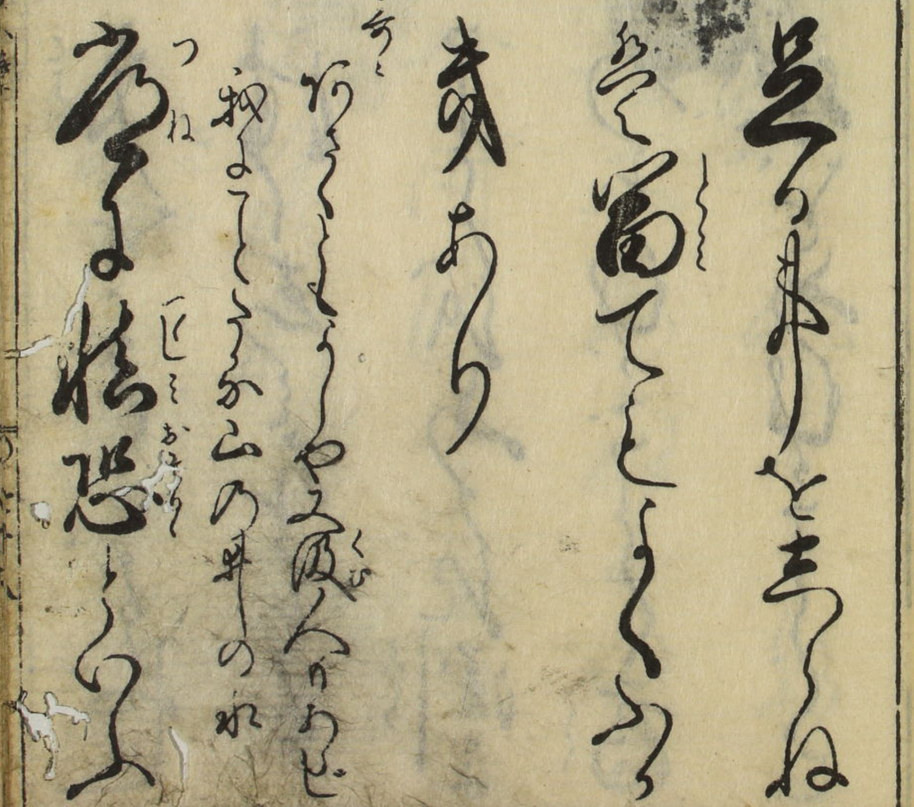
えうこの天の川の岩ふねや
きれるつれなきうき嵐ん

赤人

たなばた川うち渡りやうの岩ほうの
七夕は先こまおくひいふ

清輔

七夕をたなばたむしこまもてし
ふんりとあくうれなきうん



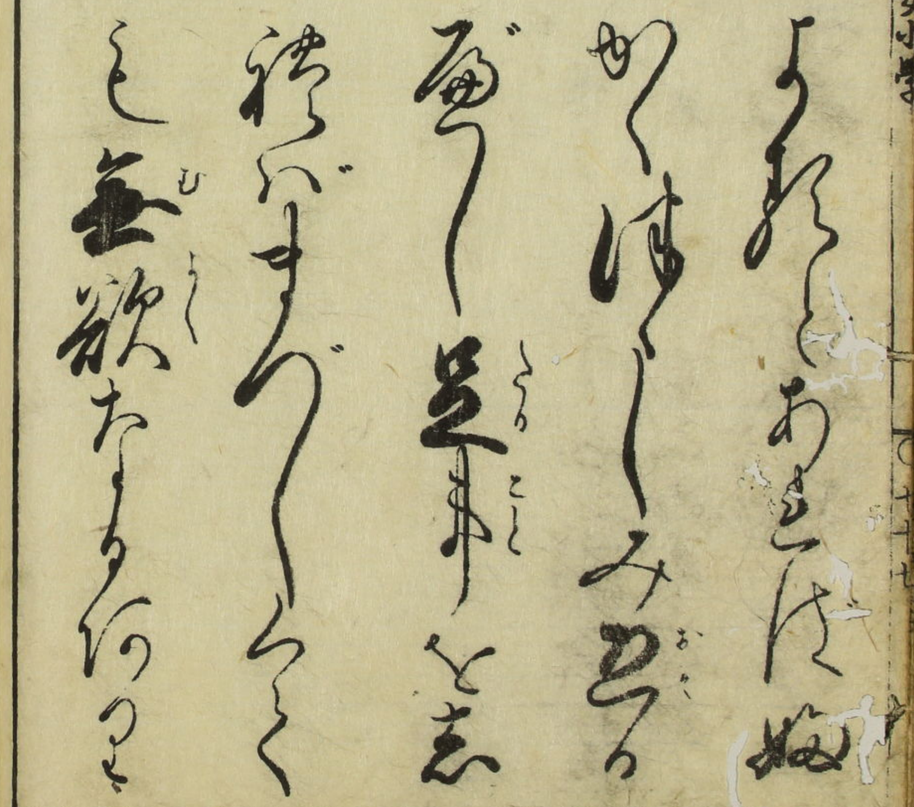
たゝしこの書にたゞきゝ
たゝしこの書にたゞきゝ
下照姫の神のいはく
とゝぬるとゝのうあゞも
ゆしいでゆ人ゆをバされ
ぞゝ人名ゝもゝで神代
ゆもたりきゝし

天川を安にしてゝ
ゝ

今宵ゝ星めたりをり
ゆきにゆや月れゝるゝを
ゆゆゆゆりゝひゝゝ

為勝の物紙作世物し
りゝ人ゝ

ゝゝ晴るゆまゝ作世物
ゆゝしゝりをしわゝりく
らゝはきれゝゝつえい



後撰織院

七夕うの花うしてあらくれ
あけ方ちかう花ちる川ぞえ

家隆

七ぐさやとを妹のたりゆく
にしきさまかれ星ぬる家

栗田

七夕ぬるしほハのぬれ川
ちかさ見て風も吹あん

実家

あはれ人の恋ひ思ふ天川
をせをゆしの一ぞ忘れも

七夕内侍

万代に思ふて天ハ七夕ぬ
ゆき合の空ぬ雲のうへて

待賢門院堀川

七夕のなを絶せぬ天のかと
いかれふ扶ちうりはあきん

能宣朝臣

いくしくとともきわ〳〵七夕ぬ
別をとの神ぞ知をそ露

西行法師

いとぬ絶て庭の小萩ぬ露ん
やのかぞとに人やゆきて

家隆

今ハ〳〵と人をくもも七夕の
妹の庭の名ぬをわけ絶

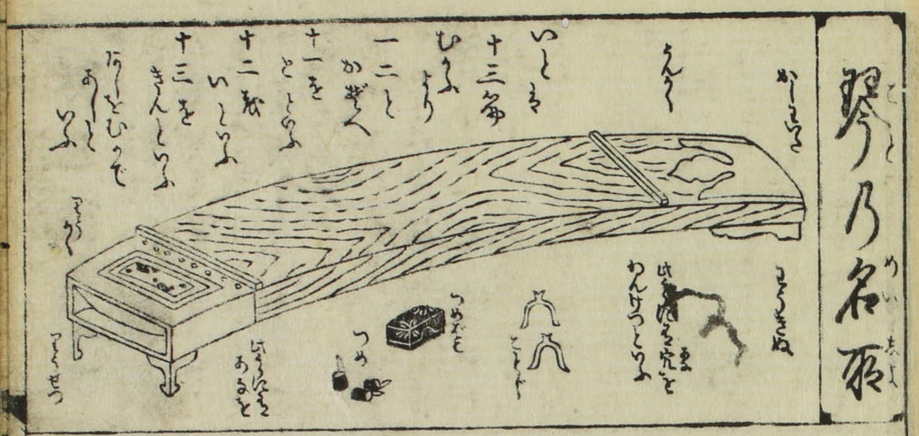
仲正

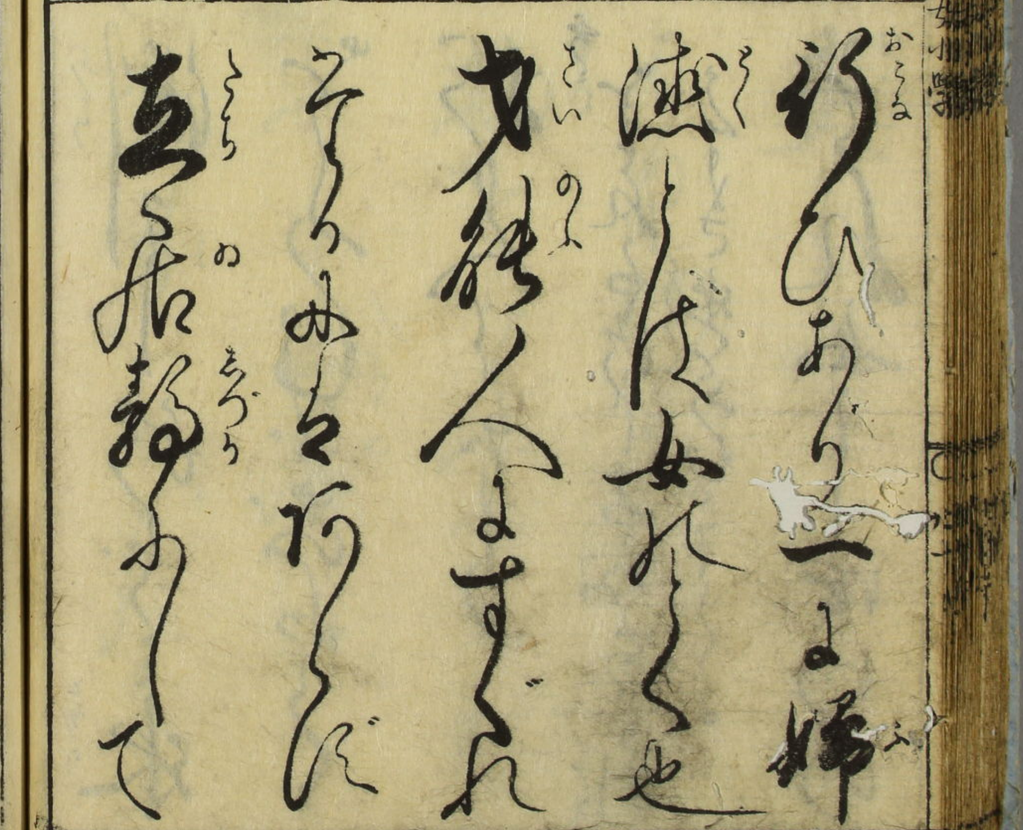
後朝ぬ会の空ぬ恋ぬ
香ぬ焼ぬとしあるらん

琴三絃乃事

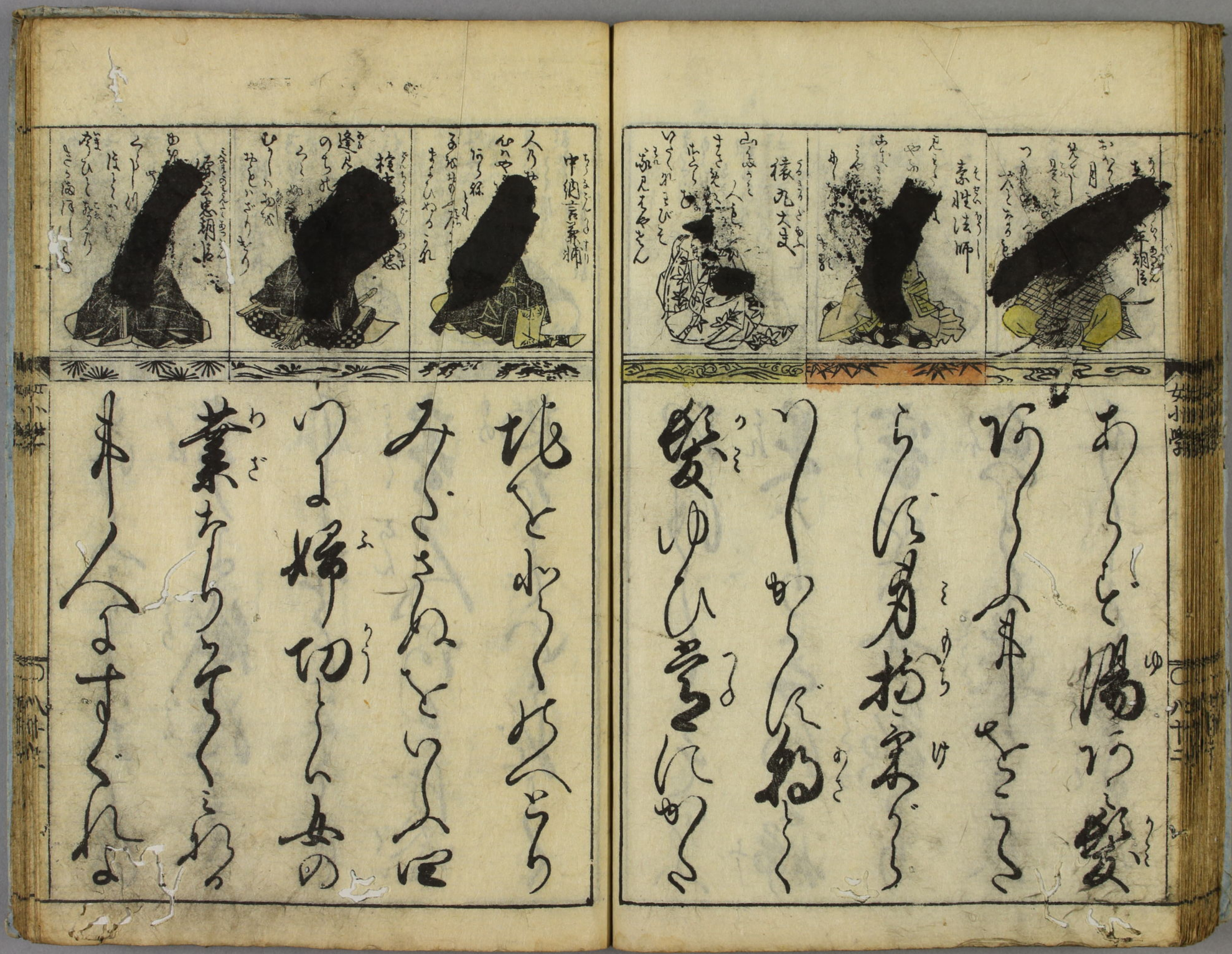
琴ハ楽器乃一つにて有へ乃事也もあまた絃りて琴びあまり太日本にわたりしを宇多多へ天皇乃御宇に唐土石川乃麻呂なるものいひし人箏乃琴を学ひて奥人にならひて箏ハ五十絃つくり天皇に奉けるそ絃つくり代乃ひしりそらに六張とあるべてあるさまなりし神武天皇ひけるあり今日おいて用ゆる琴ハ箏なり

三絃ハ既成しいつものなり楽器なり陰陽ものなりとあり





三絃乃名所
柿本人麿
中納言家持
凡河内躬恒

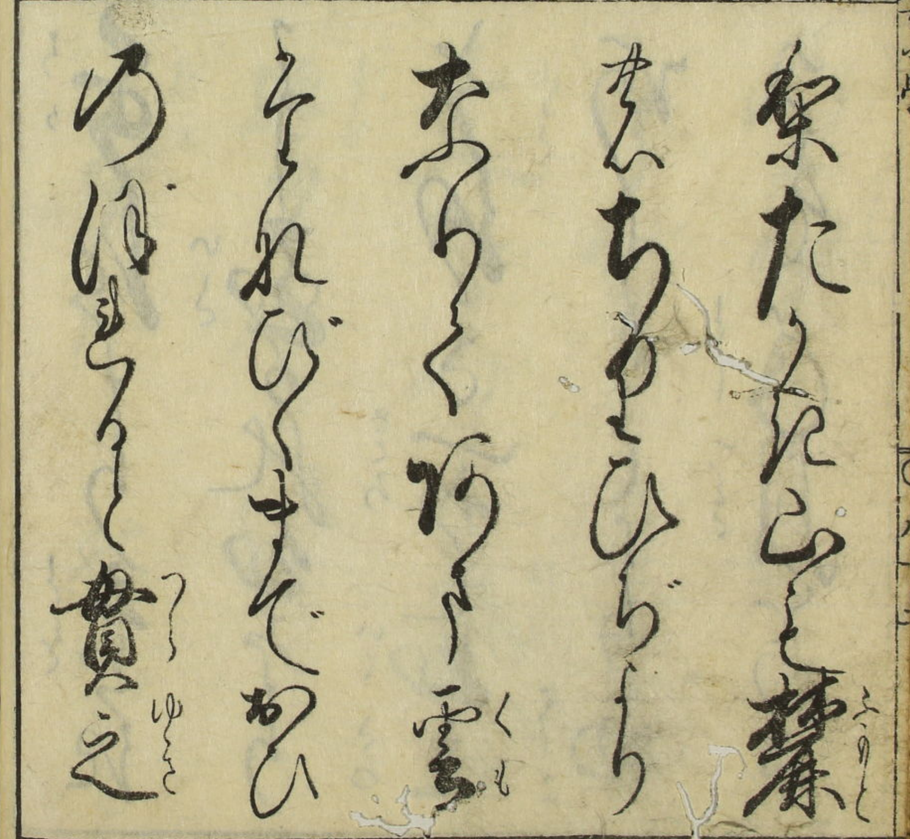

中納言兼輔
素性法師
猿丸大夫
女小學

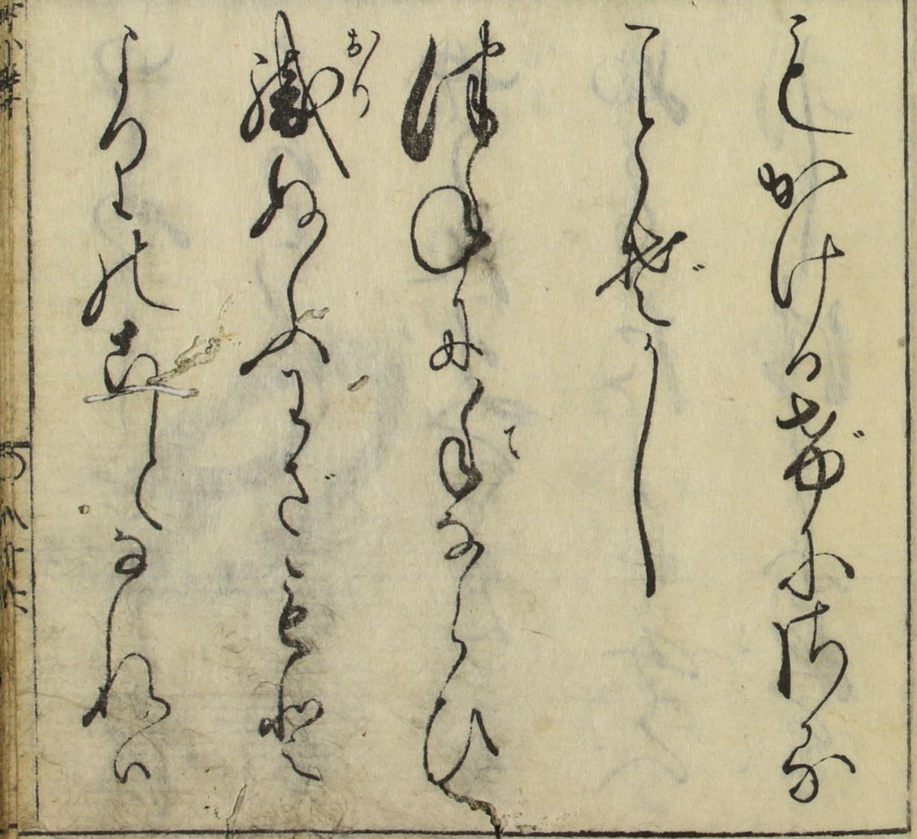
藤原清正
源宗于朝臣
菅原道真
菅原義孝
坂上是則
張良
王昭君
楊貴妃
玄宗
李夫人
武帝

三条院女房人
大中臣能宣
平兼盛
紀貫之
伊勢
西道法人

僧正遍昭
紀友則
小野小町

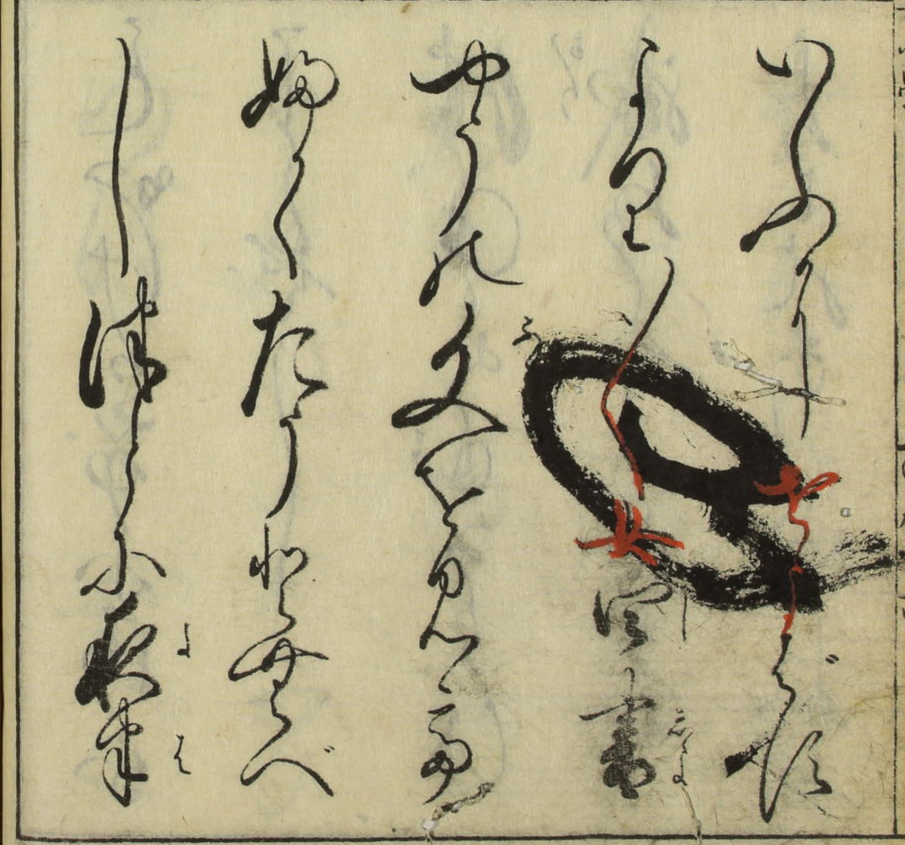
中納言朝忠
菅原高光
三条右大臣定方

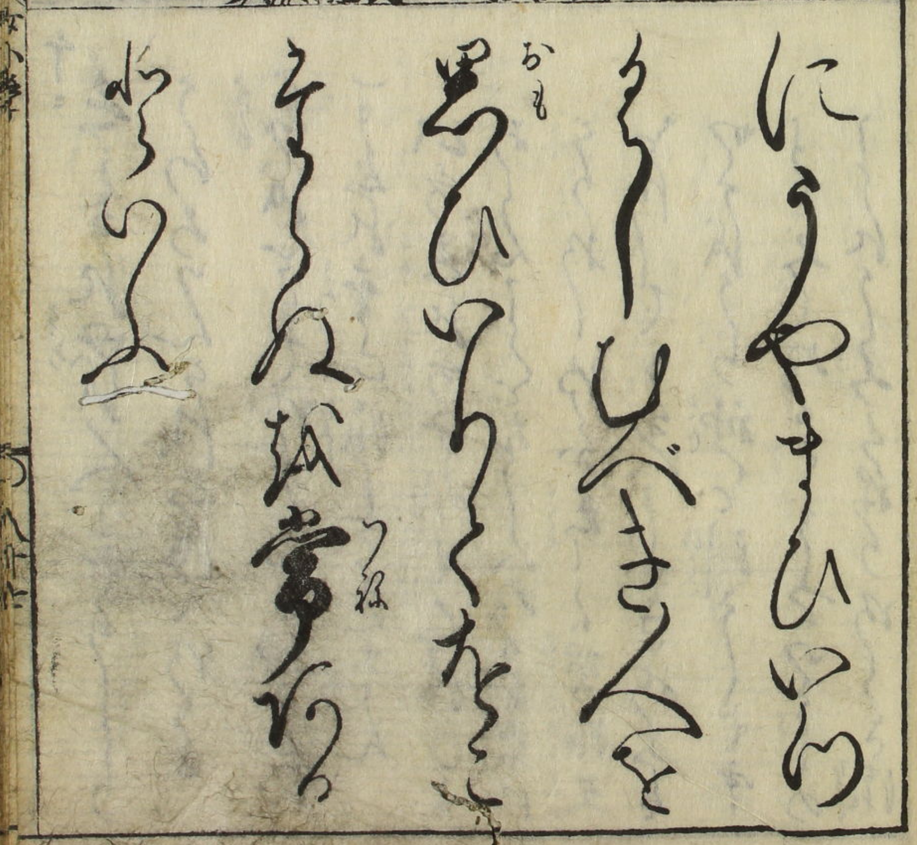


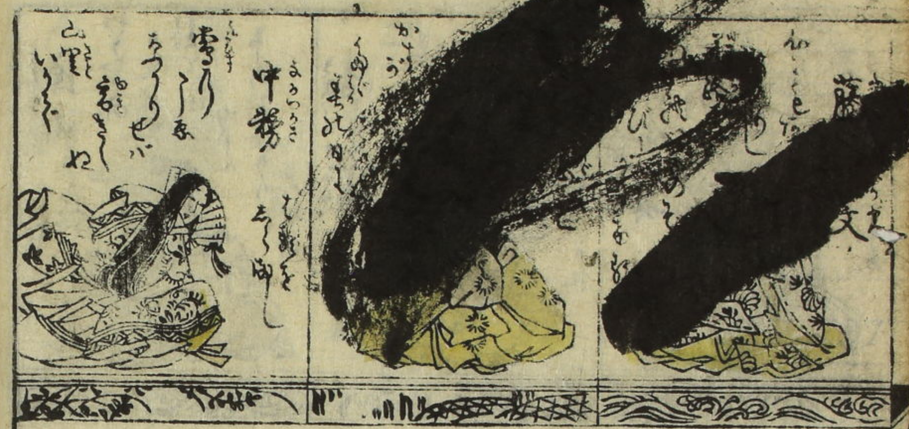


大中臣能宣
源重
源信明

源順
清原元輔
藤原元真



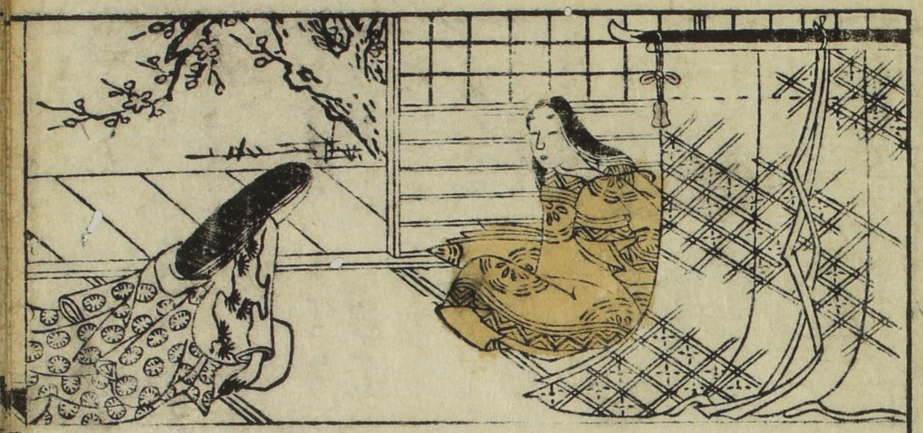




女中詞ろは

小そでハ　ごうく
おびハ　おりゝ
よぎハ　ようめしもの
かやハ　かてう
どんとうやハ　どんてう
もんつきハ　[illegible]
[illegible]ハ　おろし
[illegible]ハ　おいろ
こゑんハ　おやし
めしハ　うちまれ
こゝやハ　まくら
さけハ　むし
あまさけハ　たこん
ぬるゝそハ　あまれこん
　　ぢしんさん

一こぬかハ　まちうゝ
一せんこんハ、こゝくゞ
一まんちゝハ　おまん
一ちまきハ　まゝ
一ゆちハ　かちん
一ゆさのちハ　おさゝ
一にづたのちハ　あまちん
一ちんこハ　ちゝいと
一ぐんごハ　ゆしく
一まめのこハ　さゝふこ
一たきび候ハ　ゆろこ
一よのさ候ハ　ゆさのちん
一ゆびし候ハ　ゆのちん
一そばこ候ハ　ゆゝさゝ
一むぎハ　むすし
一あとハ　おゝゑし
一ふのやきハ　あさゞけ

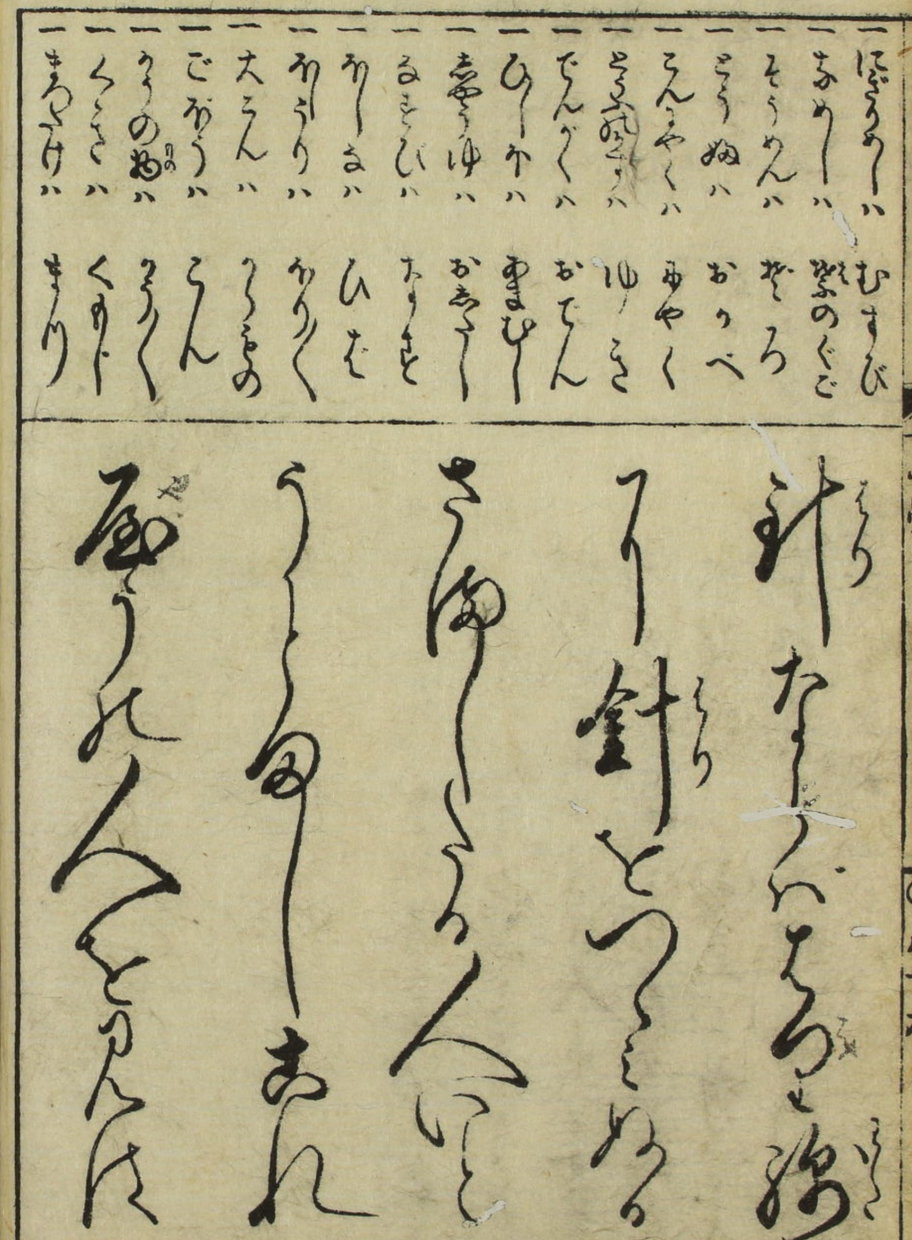


なしり

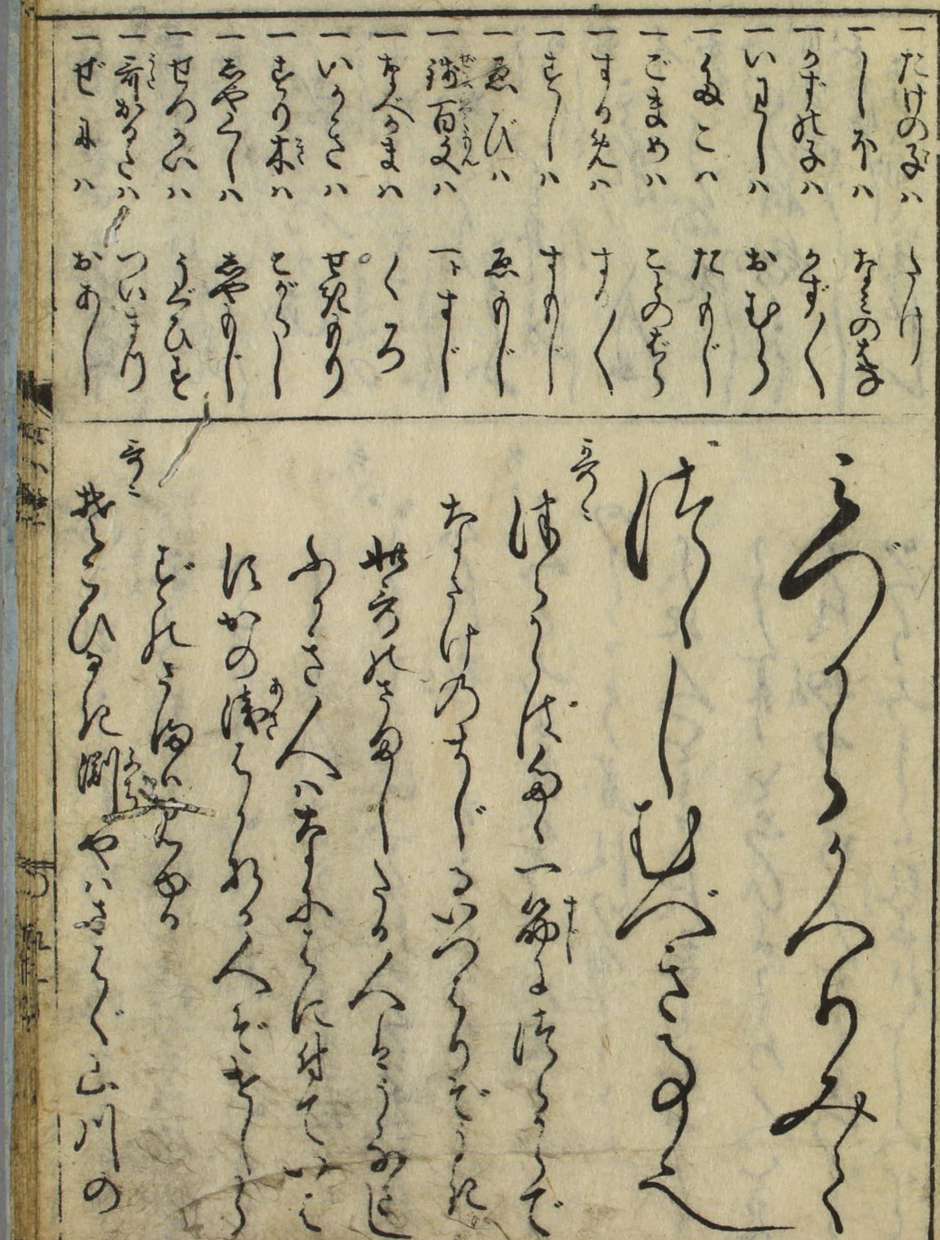
人の

綿

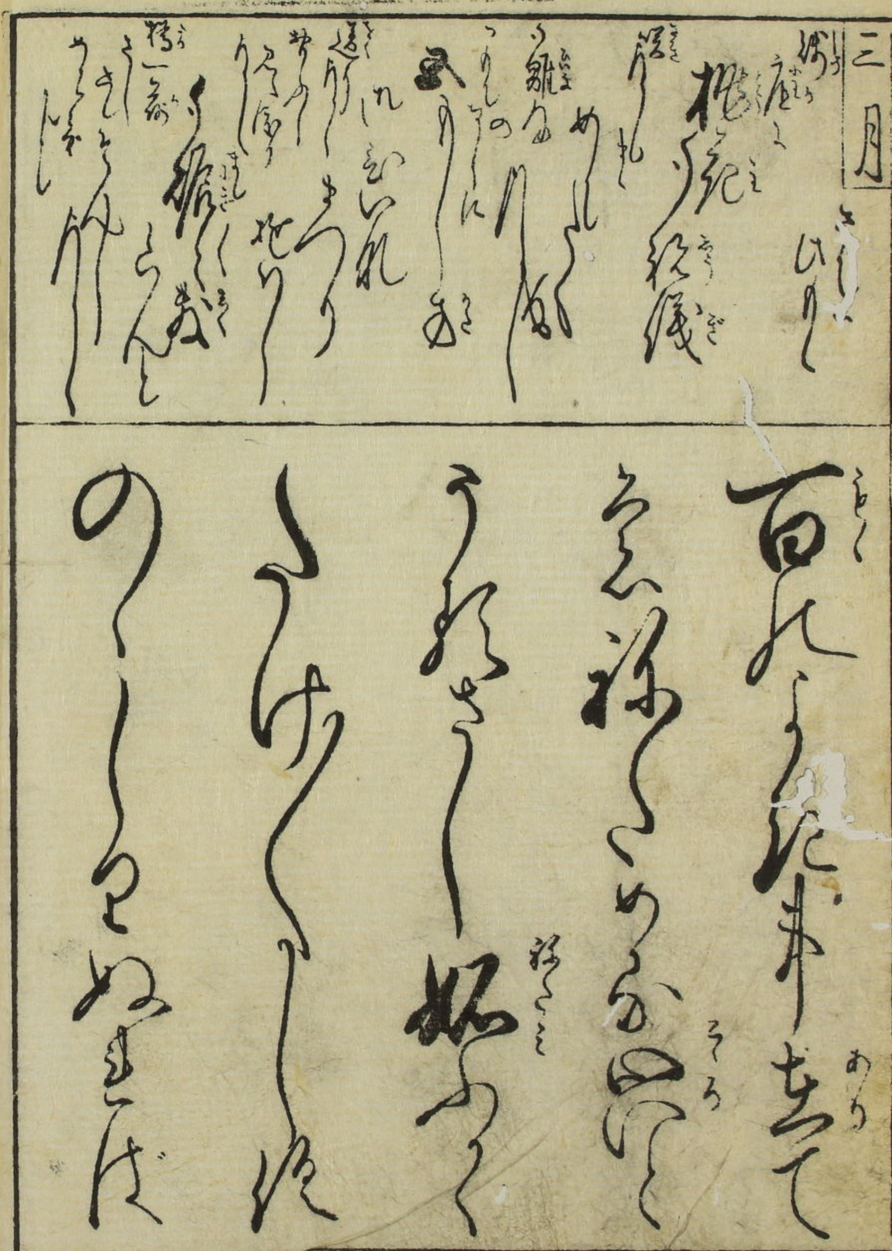
一ほうろうは　むすび
一ふのりは　ぶのぐさ
一そうめんは　そろ
一ぬは　おうべ
一うんやくは　ゆや
一うえめさうは　ゆさ
一でんぐくは　おでん
一ひしかは　まひ
一ゆは　おそ
一るとしは　たうを
一りんは　ひた
一わうりは　かりく
一大うんは　うの
一ごかうは　うん
一うのぬは　うく
一くさは　くす
一まるけは　まり

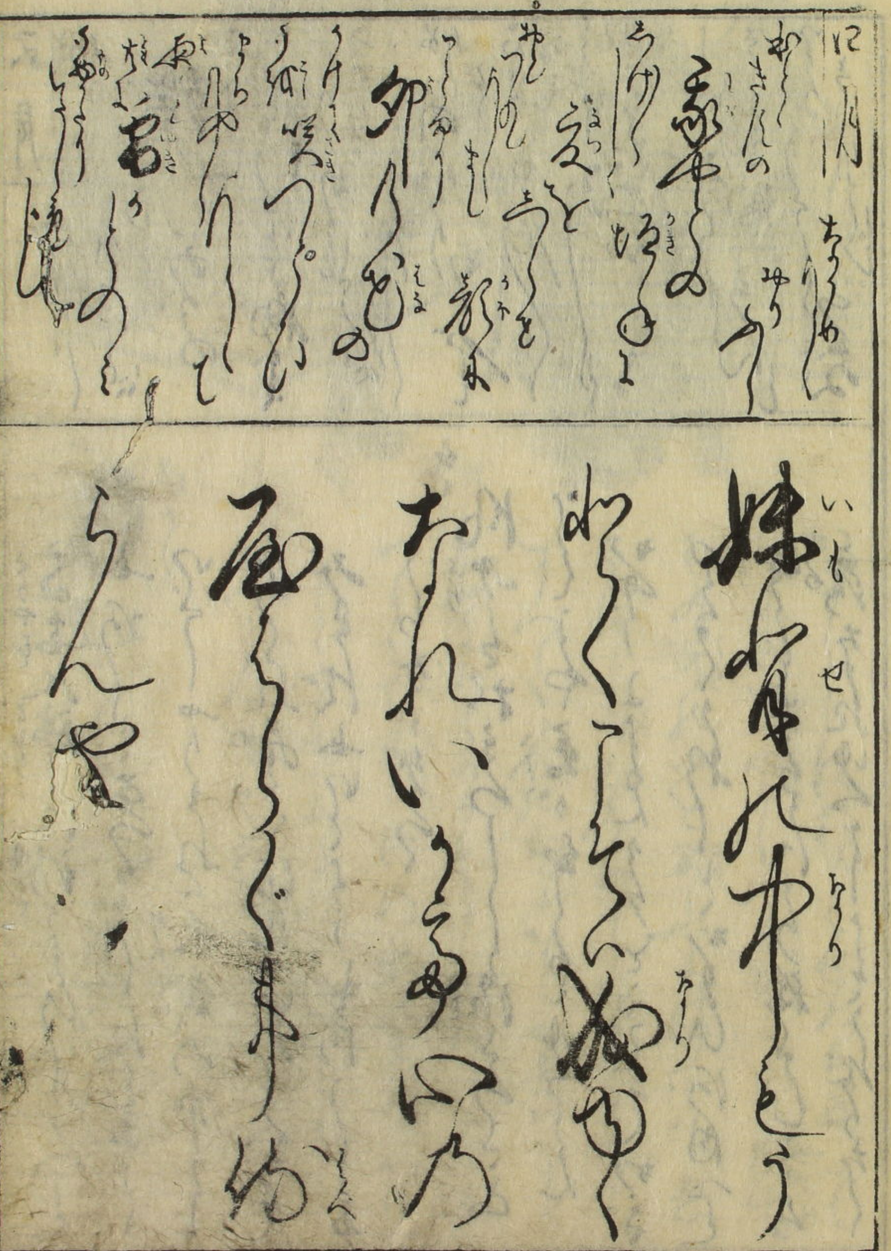


一たけのよは　うけ
一しかは　たきの
一うすれは　くず
一いりは　おむ
一ぬこは　たり
一ごまめは　この
一すう矢は　すく
一そしは　すり
一ゑびは　ゑの
一鍋百文は　下す
一ちんぐうまは　くろ
一いうさは　ぢり
一もり木は　こぐし
一ゑうは　ゑの
一せつえは　うひと
一ゑかうさは　ついう
一ぜんは　おの



三月



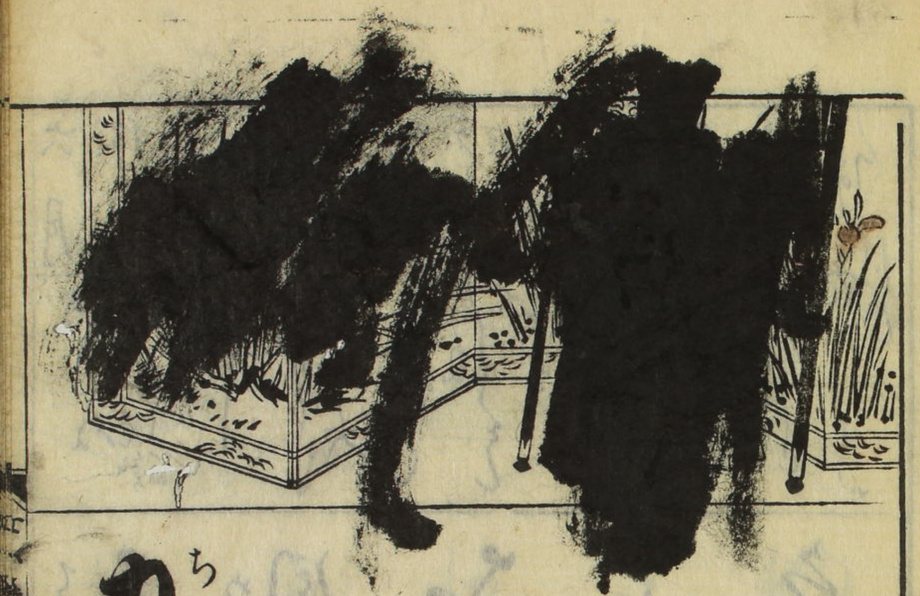


又月

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

六月

七月七日

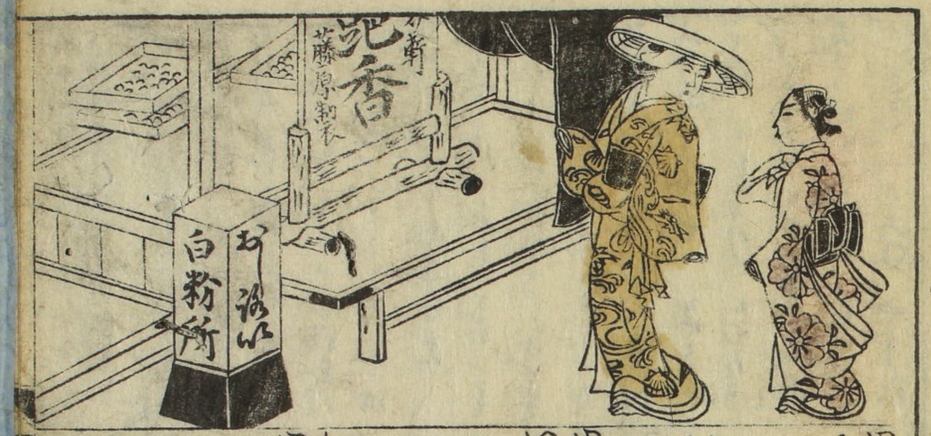
八月

九月

十月

十一月

十二月



男木　女水よくあつまりたんめいくさ大吉なり

男木　女火ちからをいれて

男木　女木さいしゅ

当世髪結い

女中こそ髪のゆひやうまた一
ハきそ形こそり髪のつや
うりうくあぶをかうう
そかかかちううあれあん
ちうさ寝ってうくもかくば
みりしに尽と所ゆめんく
あうべうれうみそうるかうど
ゆれうしほ花入さしかとを
ぐめ所をうくと物とひしうり
たまうべーさけ髪ハ上代の
うう髪くしうや　ゆうう
ゆげ　うれうげ　かつなさ
ーもうげ　かかうん　あ梅
ゆうがい　ちまう　うれうがい
うまき　つうう　やう水

男木　女今ちゆめー
のちうろーくぜ門ゆ
あうべし
ヨウ世こそ　ゆこり
人ゆハまく八うさ
ようゆのうもの
うぐーかーゆ移ど

男木　女ちゆやけん
ちれハようちうんれー
あひやうー
うの髪　しし
ふううセハ　みとハ
きうちうれ　しよ

男火　女ちゆうー
ゆううん
ゆくうひうとび
きくうぶちうれ
わうう紙ぐちよ

ちうれうう　ちうくうくうう
ちううくうくうでうれハー
うまくうれうれうまうべー
ちうりハうちうまうちうう
ゆのまうまうれうれうべー
ゆううひうとうれうまうー
うくうゆべーはうれうさゆう
ら紙うけー　ゆうにあうくう
ちうれハ八ぐうし　ゆうう紙ゆう
ひうー　ちううのくうずうう
ゆううれううくうくうれうを
のうう　うびうすーううゆい
うううれうはどゆれううう
をハ五尺乃ゆびうすゆひと
くれうもうれうううそー
まゆううれうれうれうれう

男火　女水大ひうれ
うれううれうれ
ちうれうれ
ゆうれうれ
ひうれうう

男火　女火まー
うれ
うれうれ
分ちうれうれ
かゆげれ
火れうれ
せりれのせや

男木　女木大ひうー
ゆ月にゆでゆう
ゆれいゆうう
まうれうれ
あうれうれ
うれ

男大　女金大にてこれ

男七　女金大にてこれ

男大　女大にてこれ

男七　女大にてこれ

男七　女大にてこれ

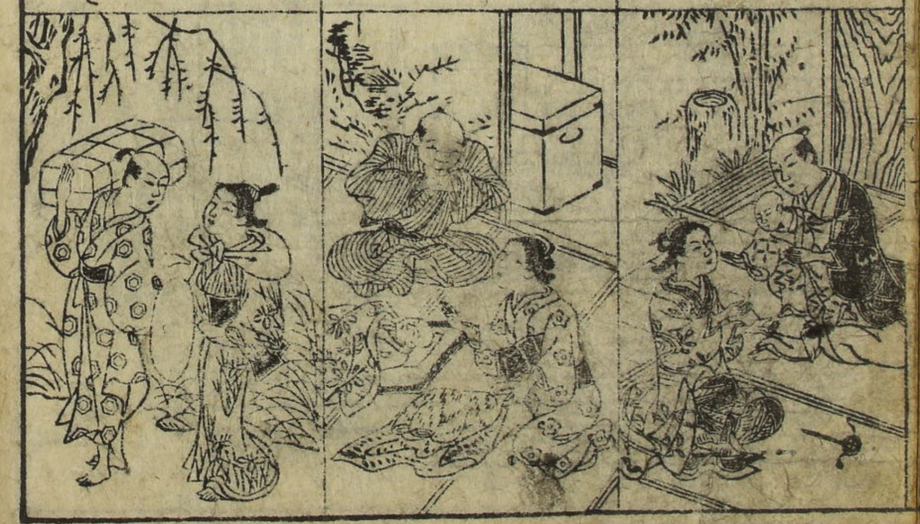
男大　女大にてこれ

男七　女本まつ

男金　女水大にー

男金　女大大にー

男金　女木大にー



男金　女大にー

男金　女金ますー

男水　女木大にー

女用目録

女はきく色紙染

恋れば貝合乃記

女たつた　四季の友

吟玉小倉色紙

女類類小倉錦

女教用文章大全

新撰小学頌雛形

宝暦十三癸未年五月吉日

画工　北尾雪旋斎

彫刻　藤村墨右衛門

書林　大坂心斎橋南二丁目　敷賀屋長兵衛版